俳　句　雑　誌

水　明

2020　11月号

令和二年十一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第十一号

《今月のかな女》

初冬の苔枯れ寂びぬ光悦寺

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

江戸時代初期の大芸術家であった本阿弥光悦の屋敷跡といわれる光悦寺の、初冬の景を詠んだ写生句である。今時の国内外の観光客が押し寄せる洛北鷹が峰の景観とは違い、静かな町並としっとりとした風情のある境内であったと思う。苔の「枯れ」は、かな女の眼であり、「寂び」はかな女の心である。

（鬼之介・註）

水　明

第1082号

―華の一句―

爽やかにラピスラズリを置く鎖骨

森本早苗

和名は「瑠璃」、九月の誕生石。深い青から藍色の宝石で、夜空のような輝きを持つという。人類に認知された最古の宝石と聞いて、夢が大きく広がった。珠状のものを繋いだネックレスかと思うが、「爽やか」に対する「鎖骨」が、句をきりっと締めている。

（鬼之介・推薦）

水明

令和２年

１１　月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
露の袖（作品）　山中みどり　6
花木槿（近詠）　由良ゆら女　7
水都小春日（近詠）　境　延昭　8
冠木門　※主宰作品の鑑賞　井口　俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　五明　昇　境　延昭　椎野美代子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　小倉　倭子　大場　順子　柚木　治子　ほか　19
季音「花」（同人作品）　井口　俊晴　梅澤　佐江　井上　玲子　ほか　24
鼓笛集（同人作品）・私の一句　56
現代俳句鑑賞　網野　月を　30

季音賞作家の頁　大場　順子　森川　義子　山田美佐尾　33

新季音同人（わたしの近詠二句）　36

水明集　渋谷きいち　野田　静香　染谷　正信　ほか　40

水明集作品評　山本鬼之介　50

水　琴　窟（水明集八・九月号鑑賞）　池田　雅夫　54

俳誌望見　梅澤　佐江　29

句集喝采　近藤　徹平　59

りんどう忌の記　丸山マスミ　60

水明例会報・各地句会報　62・65

水明全国大会・新春俳句大会のお知らせ　70

新珠賞作品募集　71

風声・水明発展基金御礼　72

後記　74

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

露の袖

山本鬼之介

白無垢の花嫁に添ふ秋の風

わけありの客に新米塩むすび

大花野放歌高吟ゆるされよ

もろびと偲びいま秋麗の回向院

袖濡らす夜露も粋に女坂

天高し火焔太鼓の二打三打

創作案山子まさに「田舎のプレスリー」

大津絵の鬼みな愉快夜半の秋

花木槿

山中　みどり

唐突な訃報多かり白木槿

下町から祭消え失せ花木槿

有りの実や祭と言うものなべて無し

マスクして人の心を推し測る

もの干してひたすら青き秋の空

新米のどさりと届く佳き日かな

指先の軽き昂ぶり新米研ぐ

五月浅草三社から始まる下町の祭礼はすべて中止となりました。九月中旬の牛嶋神社のも例外ではありません。子ども達の曳く山車の大太鼓。ドーンドーンと間遠なひびき。夜風に揺れる奉納提灯。櫓の回り二重、三重の踊りの輪。そして祭りが終ると決まって雨が降り秋が深まる。そんな景色は一体いつの事であったか、遠くかすんで、淡々と無愛想な秋が訪れたようです。

町会役員が代表して神社から拝受した護符を全世帯に梨を添えて届けました。お祭はナシですが、幸せの有りの実をどうぞ……と。

水都小春日

由良　ゆら女

百合かもめ群れ舞ひ運河華となる

一列に鷗の気迫風に向く

船を出す漢の背に冬の雷

大漁やα γ冬かもめ

禅林の磨き込まれて干大根

道行きの小春と治兵衛冬牡丹

かの件は和尚にたのむ神の留守

鷗はとても遊び上手。川岸の木に止まっている時も賑やかで楽しそうだが、小船でも来るとわっと飛び付いて後になり先になり猫のような鳴き声を上げながら河口まで下って行く。今の時季は大阪湾でも鰯が大漁。栄養満点の青魚を船から失敬するやら、お零れにあずかるやら鷗はますます元気だ。近頃は嵐も雨も暑さもコロナも未経験の際疾いことばかり。心配すれば切りがない。せめて鷗の様に青魚を食べて遊び心で生きてゆきたい。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

七月号

忍び言かはす若葉の垣根越し

「忍び言」とは含みのある言葉ではある。広辞苑には、ひそひそ話、内緒話、私語の三つが並ぶ。句の情景に私語はニュアンスの芯がずれる。恐らく、ひそひそ声で内緒の噂話であろう。「若葉の垣根越し」の設定からは誰もが好きなどぎついゴシップ話までは想像が及ばない。平和で日常的な場面設定により、「忍び言」に読み手が持ち勝ちの毒気を消し慎ましい句に仕上っている。

女店主はかつてマドンナ葛桜

嘗て青春の頃のマドンナは齢八十の今でもマドンナである。苦節の年月を経て、たまさかのクラス会であっても男たちは往時のオーラから逃れられない。

マドンナは和菓子屋の家付き娘だったのか、それとも嫁して店主に収まったのか。座五の葛桜が素晴らしい。葛桜は葛饅頭を桜の若葉で包んだものだが、饅頭にはない慎ましさや気品が備わる。左党の作者が葛桜を手に往時のマドンナのオーラの幻惑に浸っている。

蟻蠓や過去は謎めく尼法師

季語の蟻蠓の傍題にめまといと糠蚊がある。蟻蠓はユスリカ科の一種で吸血性ではない。一方糠蚊は吸血性である。何れも夕刻群れを成して飛び顔前につきまとう。その習性が如何にも目を狙うように感じられ「めまとひ」の名が付いたと言われる。尼法師を詠むに、季語が詳しく吟味されている。昔は公武を違わず亭主に死別の女性は髪を下ろし仏門に入ったものだが今はそんな窮屈なことはない。うら若く美人の尼さんを見てつい過去を詮索したくなる。蟻蠓の様に感じているのは尼法師さまご本人に違いない。

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣

「妙齢」は広辞苑によると「うら若い年頃」、新明解国語辞典ではやや詳しく〈中年以上の人や男性から見た〉女性の結婚適齢期の称とある。藍浴衣にある色気はハラスメントの誹りを恐れずに言えば、三十前後から四十程の熟れ切った年頃の豊満とまでは至らぬまでも肉付きの良い女性である。藍ではなく白地に棒縞の浴衣であったが黒田清輝の絵「湖畔」を思い出した。少しはだけた胸元を団扇で隠すようなポーズが

忘れられない。

合併号

明月や巫女舞の鈴杜に染む

清く澄み渡った月が神社の木立を照らしている。その木立の中を巫女舞の響き渡る鈴の音。冴えわたる月光と鈴、静謐な神々しい景である。中国地方の小さな町で、近在の里神楽を集めた催しに遭遇したことがある。洗練された雅(みやび)とは両極にある、幾世代幾百年と踊り続けられた土着の神楽舞とその最後の巫女舞に圧倒された。神々はこのように間近に在ったのだろう。

創業社主の銅像攻むる赤蜻蛉

創業社主の銅像に実在感がある。創業社主に繋がる血縁の何代か後の社長が、朝礼と称し銅像の前に社員を集め創業者の遺訓を斉唱させている景が見える。神にも等しいその銅像を攻めるとは不届きな。今時の若い社員は赤蜻蛉を囃し立てているのかも知れない。

十万億土聞くだに遠し酔芙蓉

「芙蓉の顔(かんばせ)」は美人の喩えである。中でも八重咲の酔芙蓉は白い花びらが次第に酔ったように赤らみ夕方には萎む。恥じらい深き女人を思わせる花である。十万億土は極楽浄土に至る間にある仏国土の数、そんなにも遠い極楽浄土よりはこの酔芙蓉の元が良いとの句意とも読める。

しかし何度か読み返す時、かな女への畏敬の句と思えてくる。かな女に〝呪ふ人は好きな人なり紅芙蓉〟がある。背景に杉田久女の〝虚子嫌ひかな女が嫌ひ単帯〟があったと聞く。挑みかかるような久女の句に対し、泰然と返す余裕。心のゆとりさえ見せるかな女であった。極楽浄土に居るであろう始祖かな女、その崇高な存在への憧憬の句と理解すべきであろう。

年頃のかな女の写真秋の昼

水明会員であれば思い至る写真がある。「大正四年、十八歳、日本橋時代」の注記がそのままかな女全集にも残る。しかしこの注記は変である。大正四年とすればかな女は既に二十八歳、日本橋を離れ柏木に住んでいた。十八歳、日本橋時代とすれば明治三十八年でなければ年次と歳が合わぬ。眉目清い容姿からは十八歳でも不思議ではないが、「大正四年、二十八歳、柏木時代」が史実であろう。吉屋信子が句集「牟良佐伎」の序文で、久米正雄にかな女を紹介された時の弁をそのまま記している。「原石鼎の〝あるじよりかな女が見たし濃山吹〟のかな女さん」丁度その頃のかな女であろう。折しも創刊九十周年の秋、始祖を偲ぶ主宰である。明治の世にあって英語を習得のかな女、洋装を見たいと思うのだがその写真の存在を知らない。

硯箱

◆季音八・九月　井口俊晴

光琳の水輪が欲しき花菖蒲　栢尾さく子

日本庭園の花菖蒲が見頃を迎えた。この日のため、水を張った一角にすっと立つ菖蒲。近くに寄って見たい人のため、株の間を縫うように、木の渡り板が設けてある。その様子は江戸時代の屏風絵を見るようだ。それから、もう一つ欲しいものが頭に浮かんだ。そう、尾形光琳が描いた水輪のような、大胆で装飾性にあふれた水の輪があったらもっといい。無いものねだりかもしれないが、この花菖蒲はもっと引き立つことだろう。

寝返りを左右にうちて夜の雷　島津　初花

寝床に入ったところ、遠くでゴロゴロと雷の音がした。別に気にする程のことはないはずなのだが、どうも気にかかる。たぶん雷の音で眠りに集中出来ないのだ。頭の中に昼間あったことが浮かんできては、消えていく。仕方なく寝返りを打つ。左を向いたあと、しばらくして右を向いてみる。そんなことを繰り返しているから、ますます目が冴えてくる。寝苦しい夜である。

髪切つて青水無月の風通す　西山貴美子

「ああ暑い、暑いったらありゃしない」と呟いたかどうか…。蒸し暑い日が続く六月、長い髪だと後れ毛が当たってこそばゆいし、汗をかくから鬱陶しい。だから、思い切ってばっさりと短くしてしまった。時あたかも、青葉の茂った庭から風が吹き込み、露わになった作者の首筋をさわさわと撫でていった。

六甲連山匿ふ気迫夏の霧　森本　早苗

夏の六甲連山は、阪神間に住んだ人でないと分からない魅力にあふれている。朝早くからハイキングを楽しみ、牧場で遊び、夜ともなれば涼しい風に吹かれ、神戸の街を見下ろし

百万ドルの夜景が楽しめる。とは言っても山のこと、突然湧き上がる霧に視界を遮られることもある。さすがに山の自然、悔ることは出来ない。あたり一面をすっぽり覆い隠してしまう霧のスピードは想像以上。「気迫」という言葉が大げさではないのだ。

眴せでもの言ふあなた夏至の暮　　小倉　倭子

意思の疎通とは言葉でするもの。ふだんなら、誰だってそう言うだろう。しかし、夏至の暮のいま一瞬、相手は「めくばせ」をして思いを伝えたのだ。めくばせしたのは男の方か、女の方か、もう一人誰かそばにいたのか。真昼の暑さが残る都会の一角、たぶん恋愛関係にある一組の男女が、無言で示し合わせたこれからの行動。なんだか往年のフランス映画を見るようなシーンである。

夏草や昭和の遺る忠魂碑　　近藤　徹平

樹々が鬱蒼と茂る古里の山のふもと、あるいは水面に光が躍る湖のほとり、この地から出征し、戦死した人達の氏名を刻んだ石碑が立っている。だが戦後七十五年、昭和が遠くなるとともに、太平洋戦争は多くの人々の記憶から忘れられようとしている。しかし、苔むした忠魂碑には、哀しい戦争の記憶がずっと刻まれたまま残っている。夏草が生い茂るにまかせてあるが、忠魂碑を仰ぎ、刻まれた名前を見るにつけ、昭和という時代を思わずにはいられない。

子燕の嘴五つ親を待つ　　野平美紗子

世の中はコロナで騒然としているが、学校に通えるようになった小学生の列を掠めるように、夏燕がすいすい飛び交っている。そんな街角の軒下に、だいぶ大きくなった子燕がピーチクピーチク、親の帰りを待っている。見れば、顔中いっぱいに開けた黄色い嘴が五つも。人間だと「五つ子」は大変かもしれないが、燕なら当たり前かな。でも、あんな大きな口で待っていられると、やはり親は大忙しだろう。

まくなぎに横丁一つ違へたり　　河野はるみ

小さな羽虫が舞っている。漢字だと「蠛」と書き、なんだか難しいが、ヌカカともユスリカだとも言われているようだ。夕方などに目の前を飛び、とにかく鬱陶しい。刺して血を吸う憎たらしいものもいるとかで、とりあえず手で払う。そうこうしているうちに、つい曲るべき横丁を一本間違えてしまった。小さな虫に文句を言うわけにもいかず、ちょっとばかり忌々しいが、ま、仕方ないか。

季音雪

懐郷　五明昇

秋立つや常念岳に鳶の舞
遠会釈無沙汰を詫ぶる踊の輪
新蕎麦待つ正一合の田舎酒
独り居の山家を護る鷹の爪
夜長の灯父の日記に染みの痕

交通安全　境延昭

吸盤で吊る「交通安全」秋涼し
兵児帯の衣桁にあまる初秋かな
秋の朝木目艶めく黄楊の櫛
有無のこと聞かず語らず桃を食ふ
唐辛子父の拳骨きつかつた

白桃

椎野 美代子

絵とばかり白桃のある画廊かな
叙情詩の断片白桃すする唇
白桃すする今しばらくの純情
白桃をちぢみやまざる母の掌に
薄明の果樹園白桃もぐ母郷

新涼

島津 初花

野仏の肩に被さる苔の花
折り取れば水の滴る秋海棠
空蟬の頑なに付く枝落とす
新涼や鋏の飛ばす木の匂ひ
記念樹の一つ年取り椿の実

歓語の時

鈴木 康世

此の秋の少なくなりし歓語の時
茅葺の燻蒸にほふ秋暑かな
隠沼に秘密基地あり鴨来る
落つる木の実を褥に笑ふ童子仏
たまさかの真夜の目覚めに鉦叩

月の浜

田寺 玲子

寄する波静かに返す月の浜
漁火へ吸ひ込まれゆく流れ星
着船の綱しかと受く秋日和
白き帆の沖ゆく秋の風うけて
新蕎麦やにはかに動く山の雲

秋思

永野史代

突き抜くる硝子の青空パリー祭
ジャッキーチェンの酔拳ゆるゆる酔芙蓉
何の羽音いまだ残暑のつづきをり
つまくれなゐを黄泉まで飛ばそ亡兄を追ひ
秋思かな遺体のやうに木が倒れ

父母の声

西山貴美子

空耳とも父母の声とも彼岸明け
禁食を解かれて先づは彼岸餅
一枝に身を委ねたる紅芙蓉
秋扇うしろに母のゐるやうな
秋灯を消しても消さずとも独り

秋の風

波多野寿子

リフト壮快ゆれて可憐なコスモス野
はるかなる思ひ出運ぶ秋の風
問ひかくる娘のまなざしや芙蓉咲く
水音の聞こゆる古刹秋彼岸
追憶は文の束より秋の蝶

水加減

星野和葉

水かげん如何の斯うのと今年米
芋飯を食ひしは昔今年米
あきつ飛ぶ手刈りで収む古代米
蚯蚓鳴くまなこ見開く磨崖仏
蚯蚓鳴くジョーカー一枚ポケットに

賑々と　茂木和子

朝顔のまだ濡れてゐる通学路
朝顔や若女房の気働き
起きがけの目に朝顔の藍の海
底紅の雨後あざやかに紅にほふ
賑々と遠忌を修す花木槿

芒原　矢作水尾

ナプキンの尖る頂秋初め
金になり銀に返して芒原
浮雲の影の波うつ芒原
星月夜遠流の島の定期船
ちちろ鳴く生家の太き門柱

砂時計　山中順子

新涼や埴輪は口を縦に開け
引き返すには遠出過ぎたり鰯雲
つづれさせ砂のつまづく砂時計
会ひ別れあと幾歳を風の盆
月代や水のあるところまで歩く

結婚六十周年　山中みどり

繰り返す昔の話ちちろ虫
諍ひは笑ひ話に紫蘇の花
手をつなぎ今は幸せ秋茜
遺影にと黄シャツの笑顔秋うらら
来夏もと願ひ納むる夏帽子

掌

由良ゆら女

新涼の風に差し出す掌
絹雲と交信しきり掌
秋天の奥の奥へと打つメール
掌にゆらり一丁新豆腐
こはさぬやうころばぬやうに新豆腐

芋虫

吉住光弥

吸うてみる秋はわからぬ味もてる
芋虫に世を睥睨のちからあり
白桃を剥きて音なき夜を濡らす
大手門ぎいと夜を吐く秋の朝
秋の朝嚙む泉州の水茄子漬

うかうかと

網野月を

葉の陰に葉の重なりて秋の風
秋刀魚焼く皮が弾けて海の音
好日や背骨は折れず焼秋刀魚
月光や鳥獣戯画を写し取る
新調靴落ちいちじくをうかうかと

呼気吸気

石井喜恵

サンプルのパスタに西日洋食屋
膝小僧のぞくジーンズ西日中
呼気吸気整へ秋の太極拳
呼び鈴のひときは高き秋の朝
秋の朝静かにつかふ厨水

こほろぎ　石山かつ子

風呂落とす声の限りをつづれさせ
こほろぎや欄間の飛天抜け出さむ
基肥に牛糞少し大根蒔く
紅絹ほのと見ゆる袖口風の盆
夜明鶏鳴くまで踊る風の盆

かな女忌　大橋廸代

水茎の細くてつよしかな女の忌
舌頭にまろばす師の句秋の蝶
牛を曳く掛け声小さし大花野
大花野娘は牛飼ひを継ぐといふ
葬送の曲は昴（すばる）よ蕎麦の花

赤短　大村節代

廃坑のここもふるさと蓼の花
船小屋に竹馬の友と星月夜
熊野三山落ちてきさうな星月夜
アルバムは亡き人ばかり牽牛花
赤短の松・梅・桜夜長かな

下番　栢尾さく子

沼黒く水蜘蛛狂ふかに跳べり
胸燃やす虫ら来て鳴く埠頭駅
料理屋の庭なり猫と玉すだれ
男よもぎ泣くまいとして首振れり
浅茅ヶ原下番（かばん）を急かす靴の音

花野　菊池ひろこ

花野来て上書きさるるわが詩歌
輪の外も揺るる踊りの下がり足
秋刀魚焼く煙がおよぶ裏鬼門
言霊を聴く秋風の交差点
鰯雲おなじ数値の体温計

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2020年11月号

特集 今もひびく昭和の名句（前編）
明治生まれの俳人50人が、昭和に詠んだ名句を紹介！
高濱虚子　松根東洋城　渡辺水巴　前田普羅
荻原井泉水　富安風生　飯田蛇笏　原石鼎
鈴鹿野風呂　長谷川かな女　久保田万太郎
水原秋櫻子　杉田久女　山口青邨　高野素十
相生垣瓜人　後藤夜半　川端茅舎　右城暮石
阿波野青畝　三橋鷹女　永田耕衣　西東三鬼
橋本多佳子　高濱年尾　中村汀女　山口誓子
秋元不死男　日野草城　皆吉爽雨　橋本夢道
中村草田男　星野立子　大野林火　平畑静塔
富澤赤黄男　加藤楸邨　篠原鳳作　石塚友二
鈴木真砂女　細見綾子　橋本鷄二　安住敦
松本たかし　京極杞陽　中島斌雄　石川桂郎
岸風三樓　高屋窓秋　能村登四郎
●総論～昭和俳句の魅力　青木亮人
●補遺～その他の俳人たち　大井恒行

特別作品30句　青柳志解樹

〈グラビア〉俳句界NOW　岩津厚子

セレクション結社「あだち野」矢作十志夫

私の一冊　星永文夫「霏霏」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　松本哉

別冊　投稿俳句界　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

季音月

流線形　小倉倭子

てのひらを返し白波風の盆
風の盆流線形の笠の波
マンドリンの夕べの調べ秋の椅子
行間を読み取る刻の虫の声
口吻を洩らし恋やもつづれさせ

白桃　大場順子

吹きこぼるる粥透きとほる今朝の秋
連れ舞の呼吸ぴたりと涼新た
吸取紙を上るインクや涼新た
白桃の夭夭として子の嫁ぐ
ふくよかな志功の天女水蜜桃

馬車の旅　柚木治子

風鐸の音色澄み切る今朝の秋
「一葉」の滋味ある筆よ白芙蓉
母の叱咤思ひ出させる西瓜食ぶ
真鰯の中骨を抜く技の冴え
花野ゆく一期一会の馬車の旅

師匠　鳥羽和風

魂迎師に問ひたきは「や・かな・けり」
八朔や律儀な父の五つ紋
秋爽や下がりで括る懸賞金
師が好む供華にさておき花芒
葛繁る鳥居が沈むダムの村

白桔梗　森本早苗

白桔梗手作り句集残し逝く
かなかなの微睡み誘ふ木のベンチ
爽やかにラピスラズリを置く鎖骨
単線やとんぼ降りるか次の駅
大病の癒えし娘と障子貼る

絣の韻き　高島寛治

鰯雲絵筆に余る波の色
片陰に入れて我が子の手を握る
伏す母の傍に置きたる桃の籠
追伸に真意が隠る秋の蟬
卓袱台と絣の韻きかな女の忌

鷹渡る　宇田白鷺

薄墨の滲みて処暑の写経かな
枝豆や越後のかほり持て届き
喜びは庭の木かげの杜鵑草
癌封じ寺出でて海鷹渡る
鳶三羽点となるまで処暑の空

若き脛　丸山マスミ

爽やかや追ひ抜き行きし若き脛
トロ箱にまだ跳ぬる魚秋の朝
裏木戸に鍵かけに出てかなかな
山峡に灯の二つ三つ星月夜
供華の無き墓に寄り添ふ鳳仙花

法師蟬　十倉和子

ひぐらしや人影絶えし御廟橋
持ち時間使ひ切れよと法師蟬
光秀の書状秘めきし萩の寺
海遠く海図ひろぐる星月夜
雲いまだ鰯になれず秋暑し

秋扇　森田祥絵

読み止しの本よりのぞく秋扇
なにもかも平らなる日の酔芙蓉
走り雨落蟬を掃く風と来る
電子辞書の電池命終残暑かな
新蕎麦や善光寺平今日も晴

走り蕎麦　藤澤喜久

松茸に酒は「獺祭」ゑひごこち
乗り継ぎに新蕎麦すする駅ホーム
「走りそば有ります」とあり「準備中」
月天心街のシグナル連連と青
幼き日天使の翅持つ赤とんぼ

剣が峰　池田雅夫

秋天を発止と支へ剣が峰
秋雨の重さを誰も気づかずや
急流を抜けて一息秋の川
稲を刈る一手一手の農魂
柿の木に登る男の子の日課かな

姫鏡台　山田美佐尾

本堂に猫畏まる蓮の花
朱の襷跳ねて鈴振るねぶたかな
初秋や襟元正す姫鏡台
面取れば八重歯の少女葉鶏頭
仕舞湯に浸りこほろぎ夢現

秋夕焼　森川義子

川釣の竿の先まで秋夕焼
朱を極む陽明門の秋夕焼
草撓ふ重さをもてり赤とんぼ
夕霧の車両基地へと回送車
蓑虫の蓑を濡らして雨あがる

息災に老ゆ　井上燈女

秋彼岸みな息災に老いにけり
何するとなく葡萄を口へつまみ食ひ
秋の雲形を変へて移動せり
夫逝きて稲刈る音の一つ消え
匂ひまで田に還されし今年藁

汚れ靴　松本光子

野辺の萩愉しき旅の靴汚し
足を止め見入る農家の桔梗濃し
藤袴かほり清けし峠道
撫子やぬれし遊女の墓いくつ
芒原風よ攻めるな彼の人を

雑魚の群　町野広子

萍の髭根をつつく雑魚の群
夜半の雨激しく浮草片寄りぬ
勤行に始まる宿坊明易し
進学を機に親離れ夏帽子
遠郭公家族の数のタオル干す

蝉声圏　渡辺舎人

蝉声圏即ち運命共同体
家中のカーテン洗ひ葉月閉づ
我が声の掠れいつまで秋曇
小豆煮る時をゆつくりおばあさん
「バイバイ・キン」して階下に還る敬老日

父母の星　荒井倶子

菩提寺に名木ありてかなかなかな
繋ぐ手を離さぬやうに花火の夜
山荘の消灯は九時天の川
銀河濃しきつと何処かに父母の星
唐辛子干さるる軒端熱気おぶ

さやけし　井関礼子

さやけしや先づ総身に朝の気を
さやけしや今在りし事謝しもして
一陣の風の爽涼朝未だき
水引草野生と言ふは逞しき
大水引狭庭を占めし野生かな

去ぬ燕　川崎道子

去ぬ燕制空権の空越えて
蛇穴に生家毀すを見とどけて
街路樹に群れて夕暮れ急かす椋
蜩や晩鐘時刻早くなり
乗換駅の立ち喰ひうどん雁渡し

生返事　原田想子

堪へがたき猛暑一句と向き合へり
枝豆や妻の小言に生返事
村中に子等の声なく蟬しぐれ
日の匂ひ引き摺つて蛇穴に入る
草取りの背中に重き残暑かな

大根蒔く　松宮保人

砂の山忘れし浜の雲の峰
縄張りて畝高くして大根蒔く
大根蒔く男きつちり筋つけて
朝夕に処暑の愁ひを感じをり
蜩の競ひ合ひゐる午後三時

秋の風

臼井由美

みなとみらいのビル街抜くる秋の風
赤トンボ物干台をくぐり抜け
雲離る満月頭上に独り占め
信州の旅の末席走り蕎麦
孫曽孫揃ひし膳や秋彼岸

桃啜る

内田恵子

秋の朝柱時計の螺子を巻く
爽やかや馬の額に白い星
打ち傷の絶えぬ少年桃啜る
柘榴の実同じ苗字の墓並ぶ
ブルースの流るるカフェ星月夜

走り蕎麦

岡野順子

走り蕎麦捏ぬる力よ身の内よ
走り蕎麦土性骨の座り胼胝
走り蕎麦の喉越しつるり我に添ふ
空蟬の空に向きては天を恋ふ
蟬の穴砂場に点々静かなり

生を享く

伊藤敦子

熱帯夜世界漫遊深夜便
コロナ禍の真つ只中に生を享く
花芙蓉シャッター固く閉ざさるる
秋の蚊に心の隙を刺されけり
露草の触れもせぬだに露こぼす

☆

☆

季音花

爽やか

井口俊晴

爽やかや一本松に雲一朶
棚田から案山子が見やる父母の家
老犬と我の歩みに残暑かな
蜩や永く痛みし奥歯抜く
胃袋をむんずと掴む鷹の爪

朝風

梅澤佐江

恋唄を指の先まで風の盆
身を焦がす恋も良きかな秋刀魚焼く
やはらかな影をふやして秋桜
くしけづる髪の細りやつづれさせ
朝風に真赭(まそほ)の芒ほぐれゆく

花野

井上玲子

オフェリアの歌は幻聴夕花野
花野来てカンジンスキーの後ろ影
秩父嶺に雲悠々と秋の朝
秋の夜百鬼夜行の絵図愉快
残照の芒野原に放心す

秋はじめ

松井由紀子

雲疾し宙吊りになる星の恋
明け方の雨はアダージョ秋に入る
イントロを躓いてゐる秋の蟬
さやけくて目の澄む魚購ひぬ
落日へ野武士走るか鬼やんま

はぐらかされて

正木萬蝶

秋刀魚焼くSmoke Gets In Your Eyes
今日もまたはぐらかされて秋刀魚焼く
晩節の秋刀魚の苦みつくづくと
独り居の手酌に添ふる走り蕎麦
あぶれ蚊やあなたによろけ沈下橋

秋出水　宮﨑チアキ

天気図を真つ赤に染めて秋出水
歩むたび何かとびたつ花野原
笹舟を一気に流す秋の風
秋風や梢に光る破れ網
芋虫の角に威厳や朝の路

秋なすび　野口和子

縫ひ針に錆を残して夏終る
秋海棠ぽきと音して手折らるる
俎板に色を残して秋なすび
虫時雨今宵ソプラノ合唱団
酢を浴びて恥ぢらひの色新生姜

赤とんぼ　上戸千津子

赤とんぼ群れて風きる谷の橋
里山に秋光放つ古代門
石仏に物言はさむと秋の蝶
酒なくも忍者もどきや酔芙蓉
行雲に秋の声聞く昼さがり

源平　近藤徹平

夜半の秋条幅書いてまたも反古
海老反りに濡らす歯ぎしり村芝居
朝顔や御七夜明けの垣根越し
編笠にしのぶ面影風の盆
武家屋敷源平競ふさるすべり

天高し　宮崎雅訓

来客の去れば鳴き出す法師蟬
桔梗や優等生の顔をして
故郷の空き家へ帰る秋意かな
手水して石段登る天高し
登校の列止まらせて威銃

角の花瓶　野平美紗子

水牛の角の花瓶に挿す桔梗
地の熱を花にあづけて曼珠沙華
網振つて追ふたまゆらの銀やんま
不動川行つたり来たり鬼やんま
畑仕事の肩に止まるや赤とんぼ

稲刈

大塚茂子

稲刈機操る嫁の初仕事
学習田武甲背にして稲を刈る
デラウェア病の友の口ほぐる
爽やかや機嫌良き子の空弁当
いつといふ見頃もなくて新松子

明日香

西浦千枝子

新装の部屋に射す陽よ秋匂ふ
明日香路の行く手行く手に萩乱る
人気なきキトラ古墳に秋の蝶
ちこちやん案山子囃す棚田の雀たち
稜線は目線にありて初紅葉

万年青の実

福田千春

万年青の実己も犬も年老いて
初さんま貌に似合はぬ箸使ひ
秋扇閉ぢて開いてハチ公前
病室のランプ点滅月の夜
兄になる児の揺るる心や秋桜

秋

後藤綾子

合歓の花音符刻みし墓碑一基
鳴き満ちて蜩夕日と共に消ゆ
なすことも無く歩く街秋の風
確かなる三半規管秋暑し
ホルンの音ホール揺るがす夜半の秋

花野

熊倉千重子

露しとど座禅の御堂押し黙る
車椅子心平らに花野中
大花野空に浮遊の熱気球
息を留め指をくるくる鬼やんま
コロナマスクしばし外して秋の風

秋刀魚

菅原知子

カンナ燃ゆ男子高校応援団
秋刀魚焼く古関裕而を口遊み
秋刀魚焼く尾頭付きの夕餉かな
秋刀魚焼く骨の髄まで喰ふつもり
踊り場に蟬腹見せて秋の風

コスモス　中野　彊

道の辺の桔梗うるはし軽井沢
コスモスと見る浅間山雲帽子
コスモスの風より色をもらひけり
赤とんぼ飛べよ晴れやか旅の空
夕立よ運の悪さも自分のもの

ラムネ色　飛永　鼓

半夏生村は緑に埋もれけり
我が村の小さく見ゆる雲の峰
ラムネ色国定忠治の村芝居
終生の友は狛犬苔の花
藍色の浴衣は過去を語るまじ

稽田　田中章嘉

稽田に下校する子の影映し
稽田に哀れ穂の出る別れかな
何時の間に庭に顔出す曼珠沙華
ほろ酔ひや川面の風に酔芙蓉
ロープウェー紅葉燃え出す嶺の中

銀髪　松山清子

涼新たマチスの赤のひときはに
艶やかに熟れ主張する式部の実
遠岬の灯のちかちかと星月夜
天の川くつきり宿の露天風呂
銀髪を綺麗と言はる秋の句座

酒さげて　河野はるみ

乳を吸ふ赤子の額秋暑し
初秋刀魚けぶらせ疫を蹴散らせり
秋刀魚の香浮き立つ下町商店街
彩雲に交ざれ秋刀魚の蒼けむり
友来るすすき二本と酒さげて

台風の目　石田慶子

ビル街に長き行列「さんま定食」
秋刀魚焼く彼の持参の塩をふり
ブックエンドのかたわれ探す秋初め
秋の浜宿の下駄跡二人分
老眼鏡探すまで無く台風の目

秋の日　下川光子

ウォーキング風の追ひ越す秋の朝
畦道を雀にゆづる刈田かな
住職の作務衣軽やか今朝白露
ペダル漕ぐ視野に飛び入る葉鶏頭
電柱を数へて帰る雁来紅

☆

☆

十年目の今、東日本大震災句集　わたしの一句

宮城県俳句協会では、東日本大震災の犠牲者を祈り、明日への一歩を刻む礎として、二〇一三年と二〇一六年に『東日本大震災句集　わたしの一句』を刊行することができました。

来年三月で東日本大震災より十年が経ちます。

この節目を俳句の力で掬いあげ、震災を風化させることなく未来へ伝える一冊となればと思います。

つきましては、左記により、震災から十年目の現在までを詠んだ俳句を募集いたします。被災や居住地を問わず、どなたでもふるって応募くださいますようご案内申し上げます。

●応募作品

大震災後十年を迎える今日までの自作一句から三句まで　既発表可

応募者は原則もれなく一句掲載します。

四六判ソフトカバー

※内容は自由ですが、趣旨にふさわしい俳句に限ります。

●応募方法

B5原稿用紙や便箋など一枚の用紙に左記内容を記入の上封書で応募ください。

①俳句三句以内

②大震災当時の居住地―市町村名（政令都市は市区名）

③氏名または俳号（ふりがな）、現在の年齢

④郵便番号、住所、電話番号

⑤句集の購入希望の有無を必ず明記（一冊以上の場合は希望の冊数）

※二句以上応募された場合は会長及び事務局が選を行います。

●応募料

無料。ただし、句集は一冊　一，〇〇〇円（送料共）で頒布

頒布希望者は、現金または定額小為替で、句とともにお送りください。

●お問合せ先など

E-mail:watashinoikku@gmail.com

Twitter:@watashinoikku

▼インターネットの応募フォームからの応募もできます。下記QRコードから。

●応募締切　令和二年十二月十五日（火）

●応募先　〒九八九―二三五一
宮城県亘理町北新町二十二の十三　坂下遊馬方
「東日本大震災句集」係
電話　〇九〇―二九八二―七二三〇

主催　宮城県俳句協会

俳誌望見

梅澤　佐江

『太陽』　令和二年七月号　通巻二一八号
主宰　柴田南海子　発行所　広島県三原市

平成一四年五月、務中昌己が広島県で創刊。師系松野自得。「軽く・楽しく・一心に、生命の輝きを詠うことをめざす」を理念とする。（月刊）

主宰句「かくもいとほし」一〇句より

うすずみ色に明け行く郷や遅桜
鯉のぼり初孫授かり候と
深谷の瀬をすれすれに春の鷹
瑠璃色のダムを頭上に山笑ふ
無常とはかくもいとほし残花散る

第一句、うすずみ色から橙色そして黄色へと生気に満ちた朝の光に輝く郷と遅桜の瑞瑞しさ。第二句、道中目にした若葉を吹き渡る風を孕む鯉幟、過疎化が進むこの郷に「男の初孫を授かりましたよ」と言わんばかりの晴れやかな景色に思わず笑みがこぼれる。第三句、第四句、いよいよ山頂のダム湖へ到着、渓谷の早瀬を鷹が低く舞っている。どうやら泳いでいる魚を狙っているようである。山頂に水を湛えた瑠璃色のダム、山は春の陽に草木が芽吹き、遅桜の華やぎの中を心地良い風が囀りを運んで来る。第五句、万物は生生流転し永遠に変わらないものは一つもなくて儚いものと解ってはいるが、散り残った桜の花が散ることさえ、こんなにまでもいとおしいものかと思うのである。

全句を通じて、生命の輝き、生と死、その先にある無常観まで深い考察の効いた御句と拝読させて頂いた。

天日集（同人Ⅰ）自選　一一名　各八句より　五名

花の冷え体調不良に鞭打つて　川村　朋子
春キャベツ言葉ぞろぞろ電子辞書　小林　孟司
中也の碑芽吹く柳の陰にあり　佐々木画鏡
一木造りの西行像や花の闇　竹味千賀子
この音は光の助走春の瀧　田中　治子

彩雲集（同人Ⅱ）主宰選　二〇名　各八句より　五名

ブランドの服のチワワと桜狩　田島久美子
鴉をもたぢろがすもの初燕　梶谷　節子
仁王門抜ければ天へ花の階　小田　康枝
花吹雪金泥洛中洛外図　大村　敏行
リラ冷の風に甘き香空は青　宮本しずこ

光耀集　副主宰選　三八名　各六句より　五名

音たててさみどりいろの春の雨　東城　雅子
艶やかにメトロノームの春刻む　三浦のりこ
「ただいま」の手に白詰草の首飾り　土居　直子
聞こえしはたしか三味の音路地おぼろ　三藤美恵子
一村の廃校に立つ花辛夷　村上　敏子

紹介した佳句はまさしく結社『太陽』の目指すところである「軽みから生命の輝き」まで余すところなく大らかに詠まれている。

天日集、彩雲集は主宰が全員の選評を、光耀集は副主宰が全員の選評をされていて、きめ細かい心配りに結社の精神の真髄を垣間見た思いである。

現代俳句鑑賞

網野月を

手短に話す秋刀魚の獲れぬ訳　竹内宗一郎

（『俳句四季』9月号・目撃者より）

上五の「手短に」が練達を示している。内容的には八・九のリズムであるが、五・七・五のリズムを保っている。去年から不漁の秋刀魚は今年になって一層不漁になった。庶民の食であるだけに不漁の秋刀魚の句を見る機会が増えたように思うが、「訳」に言及した句には新味がある。しかも「手短に」が俳味を担保している。もしかしたら、今や「手短に話」している場合ではない事態になっているかも知れない。他に「目撃者被疑者被害者皆裸足」がある。

島々のゆるり覚めをり朝曇　山中　順子

（『俳句四季』9月号・草蛍より）

中七の「……覚めをり」は本来、人の行動であるので、広義には擬人法的手法である。「島々」は「朝曇」の中で目覚めているようである、と解することが出来るだろう。朝の曇り空は、その日暑くなる兆しである。「島々」もまた暑さを予見して朝のひと時を大切に過ごしているのだ。この擬人法は「島々」を主語としつつ、作者の行動をも語っている。他に「青柿の落下に人の住む匂ひ」がある。

秋風の背を越えてゆく塔の町　安永　一考

（『俳句界』9月号・塔の町より）

イタリアのサン・ジミニャーノか、もしくはチェコのプラハを思い浮かべてしまう。日本ならどこであろうか。京都や奈良のような仏教建築、五重塔などのある古都であろうか？

塔を見上げて、または塔を遠望して、作者は背後に上五の季語「秋風」を感じ取っている。この「秋風」は「背を越え」てから前方へ、そして塔の方向へ吹いているのである。風の流れを追いながら数々の塔に改めて視線をもっていったのである。

風を待ちおとづれを待ち後の雛　井上　弘美

（『俳句界』9月号・新作巻頭3句より）

座五の季語「後の雛」の風習が今でも残る地方は少なくなった。重陽の節句かもしくは旧暦八月朔日に飾る習わしがあったようである。「風を待ち」「おとづれを待」っているのは、もちろんお雛様が待っているようにも読めるのであるが、ここは作者ご自身であろうと筆者は考えた。お雛様を飾り雛の客を待っていると読ませて頂きたい。

大夕焼どう握ってもさびしい手　塩野谷　仁
（『俳壇』9月号・風の煙より）

座五の「さびしい手」の表現が心を打つ。そして表現以上に手を「さびしい」と感じ取った作者の感性に敬服するのである。しかも「どう握っても」なおだ。この切迫感は何なのであろう。上五の季語「大夕焼」の時空間の設定がそうした心の動きを誘因しているのである。他に「箱庭に吾とおぼしき立ちん坊」がある。

未完成ロボット歩きして仔猫　渡辺　純枝
（『俳壇』9月号・郡上和良町より）

「未完成ロボット」まで一語として読んでみた。作者の仔猫への愛情とユーモアが横溢している句である。近づいてこられた時のこの仔猫の驚きが目に見えるようでもある。現今のロボットは、その能力において遥かに人を超えてしまった。が、その動作にはまだまだ未完成さを残している。スターウォーズに登場する翻訳ロボットc-3poの、あのぎこちなさである。だからこそ「歩き」の動作を入れることで見た目に安心感のようなものを提供しているのだ。

雨音の張り付く窓の日焼顔　三木　基史
（『俳句』9月号より）

上五中七は、シュールな雰囲気を演出しているように思われるが、座五の「日焼顔」で大逆転したようだ。「日焼顔」が外から屋内を覗いていると筆者は考えたのであるが、家内から外を眺めているようにも読めるのである。その場合は、雨の中に作者がいることになるかも知れないが。もしかしたら「日焼顔」は作者自身のことなのかも知れない。他に「殺し合うゲームの続き解夏の昼」がある。

雲に照る街の灯赤し招魂祭　澤　好摩
（『俳句』9月号・招魂祭より）

夕雲を赤く照らしているので、この雲はいく分低めに懸かっているようである。戦火を思わせる照りでもあり、現在の繁栄を象徴しているのかも知れない。魂の降りて来る、また昇り帰る道景を表現していると筆者は考える。他に「黒雲の隙（ひま）に青空女郎蜘蛛」がある。厳しい表現と内容でありながら色鮮やかな景を叙して、厳しさが倍増している。

年の酒むかしは皆が生きてゐて　澤　好摩
（句集『返照』より）

『返照』は七月に作者が上梓された句集である。「皆」とは誰のことなのか？数えで喜寿を迎えられているので、誰彼ではなく、何人もの鬼籍に入った同志を「皆」と表していると推測した。他に「しばらくは雨にうなづき藤袴」がある。上五の「しばらくは」なのであるから、雨が止むと、「藤袴」は茎を伸ばして、すっくと立つのである。

今でも何と沢山の「皆」が彼を取り囲んでいることか。

令和３年「現代俳句カレンダー」販売のご案内

「東京四季出版」製作の「現代俳句カレンダー」は、以前より水明発行所において取り次ぎ販売しておりましたが、ＰＲ不足もあって会員全体に周知徹底しておらず、本来の目的が果たされておりませんでした。そこで、本年より誌上でご案内して多くの会員にお買い上げ願うことにいたしました。

ちなみに、「現代俳句カレンダー」は、現代俳句協会会員の著名作家による俳句や色紙・短冊に揮毫された作品が月ごとに掲載されたもので、日々の俳句モードを高めるのに最適です。もちろん水明俳句会からも主宰はじめ有力作家の作品が出ています。

上記の主旨をご理解いただき、早めにご注文くださるようご案内いたします。

◆受付窓口：水明発行所　総務部　◆販売価格：1,200円（送料別）

主　　宰　山本鬼之介
総務部長　茂木　和子

2021 現代俳句カレンダー

揮　毫

宇多喜代子　寺井谷子　秋尾　敏
宮坂静生　鈴鹿呂仁　柿本多映
佐怒賀正美　花谷　清　池田澄子
石　寒太　花房八重子　久保純夫
山崎十生　佐藤文子　島村　正
神野紗希　高野ムツオ　森野　稔
中村和弘　山本鬼之介　衣川次郎
安西　篤　松澤雅世　対馬康子
高橋将夫　船越淑子　小林貴子
山田貴世　江中真弓
山元志津香　伊藤政美

（掲載順）

◉体裁　四色刷・月別壁掛・壁掛時サイズ36.4×51.5センチ
◉定価　一部　一、五〇〇円（税込）　五〇部以上　二割引
◉送料　実費
お申込みは当誌発行所まで

東京四季出版　〒189-0013 東京都東村山市栄町2-22-28　電話（042）399-2180　FAX（042）399-2181

私の三句

大場順子

割烹着より色がこぼれて春小袖

女の人は着物を着ると晴れやかで幸せな気分になります。着物は帯の柄、帯締め、帯上げ、羽織の裏、長襦袢とさまざまなポイントにメッセージを隠しており季節感やお祝いや格式等自分の気持をそっと忍ばせる事が出来ます。日本人ならではのゆかしさに溢れる着物の中でも年始に着る新しい衣服の春着となると一段と華やかです。句会で「春着」という兼題が出た時に遠い記憶のしかしはっきりと思い出すあの一瞬を詠もうと決めました。生家での少女の頃お正月の母は春着に割烹着をつけて忙しく立ち働いていました。その真っ白な割烹着からはみ出している春着のカラフルな生地が子供心に一層奇麗に思えました。この句はそんなお正月の母を年を重ねた今思い出して詠んだ句です。

時の日の銀座を統ぶる時計塔

「時の日」の兼題が出た時に「服部時計店」の事を詠みたいと思いこのままでは長すぎるので短くならないかと服部時計店を調べてゆくと「時計塔」という言葉が見つかりました。初代の時計塔が完成したのは一八九四年ですが関東大震災があり現在の時計塔は一九三二年に竣工した二代目です。時計塔の四方にある文字盤はほぼ正確に東西南北を向いており時計塔のチャイムは正時になる四五秒前から鳴りその余韻の後に響く第一打が正時を知らせているとありました。銀座というと決まってテレビに写るあの時計塔は高い所から四方を見回しまさに銀座の主のように銀座をまとめあげ支配しているかのように見えて一句となりました。

この道を行けば故郷草の実飛ぶ

私の故郷は山形県の酒田市です。日和山公園には実物大の北前船が池に浮かべてあり小高い所に芭蕉像があります。山居倉庫、土門拳記念館、本間美術館があり中でも本間美術館（京風の和風建築、古美術から現代美術まで巾広く展示）は生家より徒歩五分の所にあり大人になるまでたびたび展示物を見に行き帰りは鳥海山を借景にした庭園を散策するのが好きでした。学生時代は月山、蔵王、鳥海山に登りました。故郷は私の俳句の原点です。晩秋の野を歩いていた時に今にも弾けそうな草の実が風に揺れていました。この道は故郷へ繋がっているのだなあという望郷の念と共に草の実が弾けて故郷へ飛びました。

私の三句

山田　美佐尾

秋の海千尋の底に御紋章

先の太平洋戦争（昭和十六年十二月八日勃発、昭和二十年八月十五日終戦）。日本海軍の象徴として世界最大の戦艦「大和」があった。戦争が闌になり、大和は九州南方で米軍機と戦い攻撃を受け沈没した。大和の最後は一九四五年四月とのこと。乗員中（二四八九人死亡）生存者は（二七六人）。

沈んでいる艦の舳先に「菊の御紋章」が薄らと見えた。この情景をテレビで見て感動して詠んだ句である。

昭和二十年三月私は小学六年生で、新潟の長岡へ疎開していた。当時の大本営発表は、日本の軍隊は善戦して勝っている報道ばかりだった。長岡も戦火に見まわれた。

その後疎開先で終戦を迎え八月十五日天皇陛下の奉勅を聞き、咄嗟に何を云っているのか判らなかった。

今でも戦争の報道を聞くと、あの沈んで行った艦の舳先の御紋章が脳裏に浮かぶ。鎮魂の一句である。

遠泳やあの島めざし俺の海

私は小学時代から水泳が好きで、学校のプールに毎日通っていた。一日中プールに浸り顔や手・足はまっ黒になり、白い所といえば歯と足の裏だけだった。

本格的に泳ぎ始めたのは就職してから、会社の厚生施設としてプールがあったので、仕事が終わると椎名町までよく泳ぎに行った。損保会社の大会もあり、青春時代は水泳と山岳に明け暮れていた。

会社を退社して子供も大きくなったので、四十八才の時に水泳の指導員の資格をとりインストラクターになった。

あるとき、川口の女子高生の引率で遠泳について行くことになり、千葉の館山の海へ行った。

遠泳とは個人が泳ぐこともあるが、この日は生徒なので、横一列五～八名、縦にその後につき平泳で泳ぐ。

泳げない人はボートに乗り、かなり泳いだ所で口の中が塩からくなるので、一人一人口の中に氷砂糖を入れてもらい舐め乍ら泳ぐ。私たち引率者は生徒の横や後へ行き生徒を守る。

泳いでいると「この海は私だけのもの」のように思えてくる。

水泳指導は二十四年間勤め充実した時を過した。

結願の杖そっと置き冬ざくら

秩父は景勝地に富み、春は芝桜。絨毯を敷きつめたような見事さ。長瀞宝登山の蠟梅。中でも十二月の秩父夜祭の豪華絢爛の山車は最大の見応え。奇岩の立ち並ぶ荒川の舟下り。

それから秩父三十四箇所観音霊場めぐりがある。

私も昔は五箇所ほど回り立派な字と印を納経帳に納めた。

秩父は浦和から近く機関車も走っていて、その機関車の天井に色取りどりの小さな傘が吊してあった。車内放送は地元の落語家の放送があり、電車の内でも十分楽しめた。

私の三句

森川義子

飛車取りの駒のひびきや白障子

亡き夫は定年退職を迎えた後に、将棋同好会の集まりに足繁く通うようになりました。以前より将棋は好きで、詰将棋の本を相手に頭をひねっていましたが、同好会への入会で夫はますます将棋への関心を深めていったようです。

私には将棋の知識も素養も無く、夫の話に付き合うことは出来ませんでしたが、それでも障子を隔てて聞こえてくる詰め将棋の駒のひびきや、仲間との勝負での一喜一憂に、楽しんでいる様子はよくわかりました。

夫が鬼籍に入って幾年も過ぎましたが、将棋盤を見るだけで、夫のその姿やその時の部屋の様子を瞼の裏に見ることができるのです。

火の川となるや古刹の落椿

何年か前のことです。春の同窓会の帰りでした。仲間四人で、空海生誕の地である善通寺に参拝しました。

善通寺は四国八十八箇所巡りの七十五番札所で、お遍路さんが行き交い御詠歌の流れる清閑な佇まいの古刹です。

白壁の長い塀の内より迫り出した椿の枝に、真っ赤な花が蒼天を背に美しく咲いていました。

塀に沿う涸れた小川には、散り落ちた椿の花が重なり炎立つような様子で、とても見事な景色でした。

その夜の宿で落椿を小皿に浮かべ、夜の更けるのも忘れて友と語らいました。学舎の思い出は尽きることがありません。

忘れられない讃岐の旅でした。

蘆青む影の深さに稚魚の群れ

閑散とした古刹の裏は、広大な沼地が広がっていました。辺りは雑然たる有様でしたが、水際には蘆が青々と茂っています。水草がゆらゆらと揺らめく水面に目をこらすと、小魚が群れて泳いでいます。そうっと様子を窺うと、小魚は一斉にぱっと散らばってしまいます。小さな魚とはいえ、懸命に生きているその姿に、時の立つのも忘れて見入っていました。子供たちのよい遊び場でした。

近年はこの沼にも開発の手が入り、昔から大事にしていた自然の様子が、すっかり様変りしてしまいました。

そして、そこで遊ぶ子供たちの姿も減ってしまって、私は寂しいように思うのです。

わたしの近詠二句

正木　萬蝶

菅公を拝み倒せよ受験生

人生の折々に我々は神様仏様を拝む。世界の殆どは一神教であるが日本には八百万の神様が御座す。

その中でも縁結びの神様と並び親しまれているのが学問の神様即ち天神様であろう。努力は努力として最後は一家総出の神頼み、ＡＩだのＩＴの現代で何と非科学的な事だろう。天神様即ち菅公の肩の荷は何時になったら下すことが出来るのだろうか。

妻の仕草ふつと彼の夜の雪女郎

「おお怖い、怖い！」合評の時にこんな声が洩れていた。俳句は今を切り取って詠むものであるがこの句は記憶の中の夜の映像である。雪女郎が全くの虚の世界の存在なので許されるかと。人や物を通してその向こう側に甘く苦い思い出や胸の奥に秘めた事が脳裏を過る。しかし、やはり生身の妻を愛おしく思うのだ。

虚実合わせて、時には幽体離脱し、心を自由に遊ばせて句作りを楽しみたい。

近藤　徹平

海霧深し生まれ故郷は今他国

私が物心ついたのは旧満州帝国（現中国東北地方）のソ満国境の町である。昭和十七年に在満国民学校に入学した。学校は教員と生徒合わせても全校で二十人に満たなかった。

翌年秋に母は病気治療のため子供を連れて、新潟航路で内地へ引き揚げた。昭和二十年八月のソ連侵攻時には、父は偶々新京に出張していて助かったが、同級生達は、恐らくソ連戦車隊に轢き殺されたに違いないと思っている。

大西日富士を見下ろす觔斗雲

還暦を迎えた頃富士山登頂を思い立った。

富士山は登山口から終始山頂が見えている。登山愛好家は変化がなく魅力のない山だという。しかし剣ヶ峯に立つと、伊豆半島から太平洋までが足下に見える。頭上の浮雲に夕日が当って金色に輝くと、孫悟空が一飛び十万八千里飛ぶ觔斗雲に乗って眺めに来ていると思える程に、天下の絶景なのである。お陰で我家には富士登頂記念の金剛杖が五本もある。

大塚　茂子

兄嫁の秘密の漏路茸狩

結婚して五十年、彼岸とお盆には夫と私の実家に墓参りに行きます。私達が帰る前には、きまって早夕飯を兄嫁が用意してくれました。

ある年の秋、ちょっとの間外出した兄嫁が帰り、夕飯に出されたのが秩父名物「おっ切り込み」でした。手打ちの太いうどんに、茸がたっぷり、味が良く染み込んで本当に美味かったのです。「今年は茸が沢山採れるのよ」姉の笑顔が忘れられません。

ペン先を登る記憶や秋の潮

小田急ロマンスカーで箱根に、黄金色に輝く芒、霧の中の海賊船、美術館を観て、熱海の宿で海の幸を堪能しました。そして波の音を聴きながら日記を……次から次に書きたい事が止まらない。俳句を初めて四年目の秋…今日一日の感動の中で生まれた一句です。

石田　慶子

傷心の夜行列車に降る銀河

何十年も前の事、傷心のわたしは一人夜行列車の中でした。眠る事もできずデッキに出て見た大銀河、その大きさになんてちっぽけなわたし。夜行列車もとっくに無くなってしまいましたが、もう一度あの時に戻れたらあの時のピュアなわたしを抱きしめてあげたい。

耳掃除得意な夫と夕端居

わたしの好きな季語「端居」の句、今は縁側のある家も少なくなりましたが、これは結婚当初の少し奮発して泊った旅館の縁側です。庭を二人して眺めながらなぜか端っこで夫の膝の耳掃除です。

そんな夫がいなくなって五年。端居の句にはいつも夫が登場します。

熊倉千重子

文豪のこゝは常宿降る黄葉

母を連れ長野へと車を走らせました。善光寺の胎内めぐりで光が見えた時の安堵は今でも忘れられません。

その後、北向観音のある有島武郎が常宿にした旅館に一泊。窓には光りながら降るように黄葉が。閑かなひとときを過ごすことができました。明けて次の日、芙蓉峰を拝し、忍野八海、山中湖、河口湖と巡り家路へと。心身共にリフレッシュでき、母とのいい思い出になった旅でした。

ローカル線のホームに炎花（ほむら）カンナ

新潟の先の五泉で墓参りを済ませホームに佇った時、澄んだ空気の中見事に咲き競っているカンナに目を奪われてできた一句です。

スポーツ好きだった私は、子育てを終えた後テニスクラブに所属し、青春していました。五十代後半膝を痛めてしまい止むなく退部。

老後は母の影響もあって俳句を始めました。微力ながら〝継続は力なり〟を信じ歩んで行きたいと思います。

河野はるみ

兄傘寿長姉白寿の生身魂
乳を吸ふ赤子の額秋暑し

この二句を詠めた事、出合えた事が感慨深く、また姉が健康で百歳を迎えられた事と孫が生まれて来てくれた事に感謝です。

去年の夏、姉の白寿の祝に沖永良部島へ行き、祝の席の島の人達の心温まる、三線（さんせん）・歌・踊り寸劇と、笑いの絶えないおもてなしを受けた。元気な姉に会え、兄と初めての旅も出来た。景色はもちろん、夏なので暑かったが…温暖な地で食べ物も旨い。そんな島から帰ってすぐの兼題が、生身魂、まさに島での宴が生身魂で、姉の喜んだ顔を思い出しながら詠みました。

「秋暑し」は「吸」の詠込みで、今年の七月コロナ禍で付き添う事も出来ず、たった独り初めてのお産でどんなにか心細かった事か、でも難産の割には元気な男の子で飲みっぷりも良く、一所懸命乳首を探しチュパチュパと、親も子も初めてづくしの手探り状態。がんばれお母さん！っとの思いを込めて。

下川　光子

朝の歩に富士の近づく初景色

毎日のウォーキングは健康維持の目的で始めました。続けておりますといつも出会う方々との挨拶や短い会話等楽しい時間です。時には俳句の種を見つける事もあり、ますますすうれしくなります。

田圃道なので冬田は寂しくなりますが大きな雪の富士山を行く手に見る私の自慢の景色です。

微笑みを返す赤ちゃん花あんず

バスや電車の中で赤ちゃんにじっと見つめられる事があります。

澄んだ瞳に思わず頬が緩み笑顔を向けるとかわいらしい笑みを返してくれました。

ひとときほんわかとした気分で和みます。杏の花のような笑顔でした。

田中　章嘉

海霧深く塩屋岬に歌流れ
墨堤や桜伝ひに夜を遊ぶ

一句目はなんと席題は「海霧」で作りました。

とっさに、数年前塩屋岬に立ち寄った時の

事を思い出しました。宿を出てすぐでしたので海霧が深く何も見えず、只灯台が霧笛を鳴らしていました。人人は美空ひばりの「みだれ髪」の記念碑の歌を聞きいっていました。

二句目は、毎年春の花見で何処でも人出で賑わうのですが今年はコロナで、人出の花見は禁止で、桜も咲き甲斐が無かったと思いました。

この句は昔浅草へ花見に行った時の句です。墨堤に夜店と人で夜遅くまで遊んだ事を思い出して作りました。

飛永　鼓

土手の色丸ごと包む草の餅

鳥羽谷の真ん中に鳥羽川が流れている。子供の頃その土手で祖母と蓬摘みをした。その思いからか私は蓬摘みが大好きだ。今も毎年春になると鳥羽川の土手に蓬摘みの日を一日設け心身共にゆったりとした至福の時を過ごす事にしている。

さらさらと水の音、鳥の鳴き声、時々カンカンカンと踏切の音が聞こえるだけ、まるで地球上に私一人という感覚、その空間に心をゆだね大きなてごに三杯摘めば一年に二～三回作る草餅に事足りるのである。草餅は私の年中行事の大切な一つです。

八朔や地獄抜け出た顔をして

暑い夏が終り早生刈りで忙しい八朔の頃、夏痩せして疲れ果てた顔で母に会いに行くといつも「なんや地獄から出て来たような顔や。」と心配してくれた。

今年も猛暑と農作業、コロナウイルスに疲れ果てた鏡の中の顔を見て母が生きていたらきっと言うであろう。

宮﨑チアキ

鉄砲百合に天使の姿重ね見む

百合には色、形、大きさ様々あり、昨今では艶やかなピンク系、真っ白なカサブランカの大輪、純白の山百合、昔乍らの鬼百合は橙色の中輪、反って丸まった鹿の子百合も橙色で愛らしい。透かし百合等、色も赤、黄、紫、黒それぞれに魅力があり、芳香も強く刺激的である。

そんな中にあって、鉄砲百合はより深い漏斗状で、どの花よりも慎ましく清楚で天使のようで、心打たれ、大好きである。

あるがままの己をさらし秋夕焼

芝川の橋の上に佇みて、暫し周囲の景色、川の流れ、鳥たちの泳ぎ、飛翔を眼で追い、囀りを聞き、鳥たちの会話を自分なりに想像してみる。水面に映ゆる夕焼けも、やがて淡き色彩に変わり、岸辺の草も黒き影をなしてそよいでいる。

遥か彼方の地平線に、今まさに沈まんとする太陽。空も街も人も、全てが淡き光の中に沈まんとしている。

魂を奪われた一時。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　渋谷きいち

船頭の撓る竹竿夏の川
朝もやの尾瀬の白虹小屋泊り
夕焼けて釣竿重く父帰る
夕焼の中にふる里かくれんぼ
幕引は馴染の酒場遠花火

染谷　正信

天険の関所の跡よ夏木立
河童ゐる伝への沼や蛇苺
片蔭の古書舗に禁書見つけたり
半跏してホ句の想練る端居かな
命綱結ぶ鳶職炎天下

川口　野田　静香

黒南風や胸塞がれて眠れぬ夜
美容室の鏡の中の七変化
紫陽花や幼馴染と会ふ五分前
梅雨晴や通船堀の橋乾く
精霊や翡翠空へ青残し

さいたま　日髙　道を

単調な噴水の音鬱な午後
紫陽花に誘はれて行く九段坂
梅雨寒や封鎖の街の屋台蕎麦
塩分を控へて不味し夏料理
蝸牛破産知らせる紙赤し

熊谷　神田　治江

時の日の緩き歩巾や句帖手に
見はるかす嶺の息吹のすでに夏
剥落の進む晩夏の太子像
こころ乱るカンナの萎えを背にしては
自問自答ことば探して佇つ秋野

さいたま　青木　鶴城

薫風やひたすらペダル漕ぐ漕ぐ漕ぐ
白南風や下駄の運びと裾さばき
梅雨寒や助けにならぬ薄掛布
初歩き初の躓き今朝の喜雨
きぬぎぬの冷めたコーヒー明早し

晩夏光無聊のお茶にむせびたり
神木の樹皮めくれをる晩夏かな
血脈を辿れば迷路はたた神
つつがなき今日に一献冷奴
隠し子のごとき宿木夏木立

さいたま　曲淵　徹雄

走り茶や織部の皿に京和菓子
花著莪の刺繍のごとき花びらよ
矢を番ふ少年の馬手青葉風
青蛙忍術使ひ藪の中
紫陽花や化粧直しの雨降りぬ

保坂　翔太

あぢさゐ見事来し絵手紙もわが庭も
葉がくれに雨の匂ひの蝸牛
夜の雨に散るを知らずか夏椿
蝸牛角を伸して高みまで
絵馬に願かけて末社の緑蔭に

塩野　久子

擦れ違ふをとこに微香藍浴衣
酔ふ程に声高となる暑気払ひ
仏壇に夫の好みの藷焼酎
送り火の殿行くは夫なるや
あかんぼに負けてたまるか法師蝉

笹本　啓子

筆まめの義父と一献縁涼み
でで虫や野仏の頭をなで通る
絵本から飛び出したるか天道虫
葉桜の蔭にひつそり古カフェ
柏餅尻うつくしき金太郎

さいたま　新井　孝麿

分相応に生きて希望を萩の空
突如閃光地割れのやうな秋の雷
蜜豆を我が人生の傍らに
開け放つ部屋に丸寝や法師蝉
畑の野菜豪雨に狂ふ秋の雷

西幅　公子

きこしめす佳き水秋の蛍かな
嫋嫋と秋の蛍のラストラン
警報器鳴り秋の蛍も通るらむ
到来の桃熟るる夜の仏間かな
桃剥くや左手甘く濡らしつつ

山口　韶子

鶴翼の布陣ぞ霧の関ヶ原
八月や孫に教ふる防空壕
秋雷の呼び込む風や奥座敷
仏壇にふえし写真と桃のかず
白桃の産毛の肌にメスは罪

新　暦文

校門の空せばめをり夏木立
日焼子の一歩も引かぬ面構へ
胃の腑まで沁みる一箸冷奴
那智の滝幕開くやうに現るる
立秋やかな女全集通読す

上尾　横山　君夫

時の日や呼べば応ふる猫とをり
雲映す水面自在にあめんぼう
飯鮓食み夫に郷愁甦る
鯖鮓を真つ先に買ふ一人旅
秋野行く風に抜け道通ひ道

熊谷　越田　栄子

あめんぼも上州育ちビオトープ
水馬の泳法真似て伊賀忍者
大振りののどぐろ鮓に加賀銘酒
釣堀や女子も若子も釣天狗
玉音を聴きしあの日もカンナ燃ゆ

高崎　原田　秀子

炎昼の「叫び」の顔も細りけり
エルメスの騎士像凜と西日なか
億年の途中の一日サングラス
旱天や磨崖仏さへ罅走る
大西日淀む自転車置場かな

さいたま　加藤でん治

白あぢさゐ盛りて北の窓明し
兄の忌に籠あふるるほどの紫陽花を
草むしり根深き茎を鷲掴み
炎昼も凜と二宮金次郎
朝まだき深呼吸して草むしり

さいたま　秋山　紅花

金色の蜻蛉きたるは吉なるや
夭折の画家の絵に会ひ秋さびし
旅に出る夢をまた見る秋の朝
学び舎の吹奏楽に秋の蝉
流星や去りては来たる人の縁

平塚　丸屋　詠子

亡き友ら心に招き蛍狩
来し方に誇るものなし額の花
閑古鳥鳴くや余生の道険し
旱天をものともせずに咲きし花
掘割の水の澱の酷暑かな

杉戸　佐々木史女

いち面の不忍の蓮今盛ん
雷遠く一人の午後の紅茶かな
はにかみて踊る阿呆になり切れず
父の忌や父懐かしみ衣被
朝風に朝顔深き藍極む

東京　鈴木　和子

金雀枝は嬉し泣きよな花散らす
久久の浴衣姿が面映ゆし
我が道の穴ぼこ照らす盆の月
誘惑もときめきもなく晩夏
海上ねぶた黄泉へ狂喜を還し行く

吉川　杉浦　理恵

大家族集ひ頭上に天の川
追ひ来る添水の音のどこまでも
人込みを離れてひらく秋日傘
三時さす丘の日時計いわし雲
秋涼し古きカメオを付けてみる

さいたま　橋本　京子

夏羽織さらり着こなし令和の覇者
ゆくりなく疎遠の故郷（さと）の鮎届く
ゆつくりと箸を進めつ夏の膳
ひと刻の奢りと夫婦夕端居
人いきれ避けて夜空に遠花火

東京　河原　叔子

流星に叶はぬ願ひ洩らしけり
秋暑し貨物列車の鈍き音
糸瓜忌に声援できぬプロ野球
ゲーム機が奪ふままごと赤まんま
箸使ひ習ふ子抓む木の実かな

さいたま　斎藤　みよ

夏風邪に医師との距離も遠くなり
ふはりと来てふはりと帰る夏の蝶
紫陽花に抜け道の路地教へられ
薫風や笑顔の父の碁の一手
度忘れの一つ二つに夏来る

さいたま　水野　興二

木道を立ち去り難し紅蓮
赤のまま失せしスマホのベル待てり
土砂撤去ブルに震へる赤のまま
庖丁を研いで向き合ふ大西瓜
ケセラセラ覚悟新たに涼新た

伊予　向井　章子

木槿垣ギターつまびく音漏るる
新涼やのれんかすかに動きしか
白木槿見上ぐるをみな薄化粧
いづこから琵琶の音きこゆ夕月夜
たそがれて大葦原に鳥群るる

さいたま　臼田　みち

終戦日我が入隊日二十日なり
田舎家に昭和の名残り木槿垣
新涼や大の字になる青畳
通夜帰り残月淡く西へ消ゆ
卒寿過ぎ口紅薄き浴衣かな

川村　治

子等遊び夜は蛍の水辺なる
夏祭大太鼓曳く子等の声
黙黙と朝粥を食む安居かな
法螺貝の響く僧列涼新た
秋の雲篝火に浮く能舞台

さいたま　岡田　宣子

炎昼のレールを換ふる保線員
真白なる冷麦瑠璃に渦を巻く
熱帯魚見つむる猫の好奇心
生まれては儚く消ゆる流れ星
桐一葉ほのかに揺るる恋心

反町　修

蜘蛛の子の方円に散る早さかな
払へども蠅捕蜘蛛の親近感
若竹が笑ひかけたる露天風呂
この国も栄枯幾たび沙羅の花
川岸の栄えし宿も梅雨出水

山戸　美子

虹めざし歩けば虹の遠ざかる
五月雨や最中頬張る軒の下
六月や真ん中ほどにある憂鬱
泣くでなく泣かぬでもなく五月闇
風死すや空を見あぐる喉ぼとけ

若　狭　檜鼻ことは

鈴蘭の純白雨に光りけり
短夜の愚痴の電話に砂時計
贈答にこだはる国産鰻かな
鈴蘭のブーケを捧げ君偲ぶ
上等の和菓子にかなふ新茶かな

さいたま　小川　洋子

季語ならぬマスクを作る青嵐
やうやくに授業始まる濃あぢさゐ
明易の手押しポンプのきしむ音
短夜の縦書きの文字曲がり来る
モルヒネてふ最後の救ひ夏落葉

東　京　石川　理恵

子の下着母の爪より蚤の音
かなかなの声に一山共鳴す
蜩を泊めて神木深ねむり
静寂を破る警策涼新た
綱放す漁翁のいのち精霊舟

小　浜　松島　寛久

牧草を刈り取るやうに草を引く
草を取る自問自答のもう一人
紫陽花や天へ続くか登り道
紫陽花の花の終りを悼む母
恋人と言へず言はれず夏のれん

さいたま　千坂　平通

鉄塔の映る川端蜻蛉群れ
糸蜻蛉立ち漕ぎの子のアキレス腱
雲に名を悟空と付くる草矢の子
草矢一瞬夕日に紛るる虚空かな
とつとと行く夫の背めがけ草矢打つ

さいたま　森　和子

出棺を見送る鴉梅雨ながし
もののけの森に息づく苔清水
修験者の太き柏手山清水
上州の三角野郎葛餅食ふ
ドーベルマンの鼻の頭に蚊が止まる

飯田　忠男

提灯の迎火守り角曲がる
気分よく入笠山の花野行く
若狭瓜割清水あふれて飛泉なす
法師蝉読経に交じる大伽藍
友の家の夕顔の花道しるべ

森下美智枝

今日からは第二の人生雲の峰
面会の語らひ朝顔咲くロビー
トンネルを抜けて故郷緑濃し
西瓜食ぶコロナごもりの台所
テーブル一ぱいとりたての夏野菜

蕨　細井　良子

コロナ禍の墓参に代ふる文長し
コロナ禍の一〇分換気風暑し
もつたいなし三食余す敗戦忌
そばえ来る一本道や稲の花
秋夕焼日入るや空は海の色

横浜　山岸　弘子

黒猫のじつと見つむる金魚鉢
猫の手の伸びて金魚の反転す
帰省子の黒髪なびく車窓かな
枝豆を茹でて織部の猪口二つ
楽しみは読書なりけり処暑の椅子

さいたま　高原　和子

迎へても仕舞寂しき送り火よ
残暑なり角つき合はす家ごもり
法師蝉けふも一日恙無く
分かれ道子の行く方に片かげり
青田道子を待つ母の白い傘

菅原　真理

釣堀で初見の鯉にすくむ児よ
せせらぎの岩魚で祝ふ友の古稀
ソーダ水竹馬の友を懐かしむ
老骨を励ます妻のソーダ水
蝶が舞ふ社の庭で聞く祝詞

熊谷　篠塚　正行

両神の山小屋の朝清水汲む
夏の日の引出しの奥青い日記
一面の蓮華のかなた地平線
パーマ屋の約束の時片かげり
反り返り暦頑固に残暑かな

越谷　阿部　幸代

夕顔の白の魅惑に時忘れ
夕顔や残されし日々寄り添うて
夕暮れてほつと寛ぐ夕顔よ
愛犬に添寝する父夏座敷
平和への灯籠流しオンライン

さいたま　野村　美子

敗戦忌機銃掃射の音いまだ
敗戦忌押し戴きぬ塩むすび
なんどきも熱き茶のある敗戦忌
稲妻や祖父はしきりに髭なでて
かなかなや若き和服の棋士勝利

高橋　敏子

背伸びして沓脱石のかたつむり
今宵また囁きあふは合歓の花
閼伽桶の水ゆらゆらと秋の蝉
三連水車の水音カンナ燃ゆ
戒名に黙の字秋の蝉しきり

川崎　鈴木　玲子

物干す手止めて蚯蚓のベランダに
乾きゆく頭無き蚯蚓の伸び縮み
ベランダにのたうつ蚯蚓咎無きを
雨宿り我を見つむるえごの樹下
緑陰に侏儒遊ぶごと園児たち

さいたま　本橋　稀香

夕日追ひどの道行くも麦の秋
衣更へ鏡をみてもひとりかな
今朝の陽に紅さし初むる額紫陽花
子燕の顔中口に焼まんぢゆう
初夏の田圃が日日に逞しく

栃木　佐々木典子

子蟷螂鎌の構へのまだ甘く
子蟷螂一皮剥けて猛猛し
はたた神乗り来る雲の足速し
はたた神気持を鎮め遠ざかる
はたた神遠ざかりつつなほ閃光

東京　水落　守伊

噴水の止まり帰宅を促さる
短夜や島の居酒屋店仕舞ひ
合歓の花万葉乙女の髪飾り
母好む谷中銀座の穴子飯
文豪の住みたる町や涼新た

草加　外村　紀子

世直しに刀はいらぬ青あらし
ふんどしや天衣無縫の端居かな
むらさきの香気芬芬片かげり
空と風よみて散歩や今朝の秋
鰯焼く香に惚れそつと撮み食ひ

さいたま　安倍　弘夫

時なし大根の辛味に秋を覚えたり
誰も彼も同じ事云ふ熱帯夜
コロナ続きに庭はジャングル茗荷の子
家族揃ひ飛入りとなる茗荷汁
幾度の検査も終り百日紅

横浜　川島　典虎

拍手のこだま広がる処暑夕べ
五十輛つづく貨物や処暑の風
子規句集とぢ枝豆の青つまむ
山の日や外出自粛令重し
牛の道処暑の微風をやりすごす

さいたま　山下ユリ子

思ひ出とともにぽろぽろゆすらうめ
一センチ程の蟷螂シャツにのる
翡翠や一瞬きらりと飛びたてり
えごの花小鉢で売られ道の駅
空へ空へ色とりどりに立葵

鬼石　榊原　聰子

秋の川ミーティングする鯉の群れ
目をやれば川に流るるかぼちやかな
亀が卵を四個も生みし秋の昼
すすきの野かき分け登る四人連れ
一心不乱に魚釣る夫や今朝の秋

和歌山　南條きわゑ

お祭の中止もコロナ捩花
青トマト揚げても翡翠の色保つ
びしよ濡れのどろんこ遊び夏来る
旅終へて死海の泥で髪洗ふ
風は秋死海の泥で朝パック

藤沢　小島喜代子

耳朶の天道虫や踊りけり
七ッ星自慢の家紋天道虫
大鳥居潜り参道白日傘
母の齢準へながら盂蘭盆会
大海へ乗り出す一歩夏行かな

さいたま　福田　育子

白塗りの役者の顔に玉の汗
旱天に工事現場の重機音
クーラーを利かせ缶詰テレワーク
短夜や看護士を呼ぶベルの音
持ち歩く手提げ袋にてんたう虫

武田　重子

見得を切る派手な隈取り夏芝居
居酒屋で下戸の乾杯ソーダ水
自販機の水は売り切れ旱梅雨
移動スーパー婆達が待つ夏の昼
保育園に母を待つ子とてんと虫

さいたま　湯浅　和

就活の子に朗報や今朝の秋
秋立つやせめてマスクでおしやれして
街炎暑バス待つ人のディスタンス
夕顔や再放映の顔若し
白木槿内輪で修す三回忌

田中　泰子

楸邨も短歌詠みしと知る葉月
早朝に給ふ苦瓜翠光る
雨近き朝青紫蘇を束と苅る
戸を繰れば慌てふためく守宮の子
丘の中学校教員室の蝮酒

宮代　関谷多美子

くちなしの辺り説き伏す香りかな
話し声瀬音に消ゆる処暑の里
名水のしぶきを受けし苔の花
鬼灯の命の宿る明かりかな
躊躇してはづみとなるや葉鶏頭

若狭　岡本　祥子

噛み合はず会議延延芋あらし
何時になく数独解けず黍嵐
Uターン紙飛行機は緑蔭へ
泊り客ランプ磨きし夏の尾瀬

さいたま　綿貫ひさの

夏木立背にひんやり風の道
夏安居や墨の香残る文机
北岳の山小屋の朝霧動く
雨やみて水面に映る秋の蝶

木村るみ子

鳥帰るつるべ落しの陽の中へ
赤とんぼ明日の天気を告ぐる雲
百体の野仏巡る秋日和
新月や六体地蔵まろき影

篠﨑　紀子

小さき秋瞳が子らと合ふ円座
クレヨンの淡きを探す秋桜
柚子の香をまとひ村中丸くなる
千屈菜やほほえむ妣に重なりぬ

所沢　関根　千恵

尾瀬の小屋立ち去り難し燕の子
懐石に寺の景盛る四葩かな
青蛙棲めば何処も小宇宙
ぽつねんと美瑛の丘の夏木かな

春日部　諏訪サヨ子

古代から香りほんのり大賀蓮
盂蘭盆会読経の響き続きをり
新涼や源氏の君に逢ひにゆく
天高し若き二冠の可能性

さいたま　小駒さち子

夏安居や僧にまつはるミントの香
夏木立光合成を嗅いでみる
読み止しに秋の蝶落つ伊藤野枝
新涼や会ひたき人に会へぬまま

横山　礼子

久びさに旧姓呼ばる酔芙蓉
夏の城「ミストの術」の忍者かな
紙芝居にきざむ記憶や終戦日
コロナ禍に檀家廻れぬ盆の僧

和歌山　髙橋満耶子

燃えたぎる恋をおもへり藪萱草
幼日の青き思ひ出蓮の実
大の字の男はみだす砂日傘
這ひ這ひを追ひかけおくる団扇風

嶋田　洋子

廃校の百葉箱に添ふカンナ
秋の野や時に横切る甘き風
睦まじく想ひを辿り秋の野へ

さいたま　緒方みき子

狼煙場のある城趾や遠郭公
空を突く古刹の塔や遠郭公
盆道を愚痴吐く老婆刈り進む

小川　藤間　友二

馴初めを箇条書して盆用意
秋暑し遅延の続く停留所
休暇明朝の礼さへ大人びて

大阪　遠藤　人美

ながら雨に晴雨の日傘友として
何処へと天道虫を眼で追ひぬ
コロナ禍に日傘とりどりディスタンス

さいたま　伊藤　保子

☆

ざわざわと日差し遮る夏木立
刺されても殺生はせず夏の終り
新涼や素肌にしみる化粧水

樋口　元美

☆

作品評

山本　鬼之介

夕焼の中にふる里かくれんぼ　　渋谷きいち

季節を問わず、夕焼け空には郷愁を覚える。とりわけ夏の夕焼けは雄大で時間も長く、それだけに、他の季節では味わえない独特の感情が募ってくるのだと思う。「夕焼けの中に故郷がある」という句意の俳句にはこれまでに出会ったことがあるが、それでは常套句の域を脱し得ない。「かくれんぼ」が付加されたことで、雄大な夕焼けと対峙して生まれた作者の夢が、大きく膨らんでゆくことを物語っている。幼少時にかくれんぼをして遊んだ故郷の景色が、夕焼け空に見え隠れしている。

命綱結ぶ鳶職炎天下　　染谷　正信

ビルやマンションなど、高層の建築物の基礎工事に携わる鳶職は、建設業界にとって欠くことの出来ない職種であり、鳶の親方は勿論、従事する人各々が職人としてのプライドを堅持して日々の職務を全うしているのだと思う。一九五八年（昭和三十三年）に完成した東京タワーの建設時に、命綱を装着せず30㎝幅の狭い足場の上で800℃に熱した鉄鋲の受け渡しをした鳶職の苦労談が、「死のキャッチボール」として今もって語り継がれている。今時は、規則によって高所作業には命綱の着用が義務づけられているので、万が一足場を踏み外しても最悪の事態は避けられるだろうが、地上にいても厳しい炎天下の高所で、これから作業に取り掛かろうとしている鳶職の緊張感がひしひしと伝わってくる俳句である。

美容室の鏡の中の七変化　　野田　静香

美容院の客の前の大鏡に映っている紫陽花であるから、それがどういう状態でどこにあるのかが気になる。店内の花瓶に生けられたものか、それとも店に隣接している庭に咲いている紫陽花か。よくよく考えてみると、その詮索は無用なのだと気付いた。即ち、鏡の中に紫陽花の実物が映りこんでいると同時に、客も紫陽花なのである。好みの形に髪をカットしてもらい、洗髪してブローされて刻々と完成に近づいてゆく髪。まさに髪の七変化である。

蝸牛破産知らせる紙赤し　　日高　道を

異色な俳句である。税金・国民健康保険料・国民年金保険料の滞納や破産などに伴い、所定の手続きが履行されないと

赤紙の催告状が届けられ、最悪の場合は強制執行の発令によって、家屋・自動車・家財道具などに「差し押さえ」と記された赤紙が貼られる。こうした現場は、テレビドラマなどで目にすることはあっても、実生活面で体験することは希有なことである。作者が実見したかどうかは別として、その当人にとっては目の前が真っ暗になる出来事であり、親類縁者や友人知人にとってもショックなことで、近所の人達も驚くことになろう。常に家を背負って行動する蝸牛に、羨望の眼差しを送っている作者である。

こころ乱るカンナの萎えを背にしては　　神田　治江

長く伸びたカンナの茎に脚線美を、そして、先端の花に均整のとれた女性の顔を重ねると、掲句に詠まれた心情が理解できる。盛りを過ぎて茎に張りが失せ、散りかけている花を見た作者の胸中に、正視するに忍びない憐憫の情が湧いたのであろう。そして、カンナに背を向けてから生じた感情が、上五に書かれた「こころ乱る」であると解した。

白南風や下駄の運びと裾さばき　　青木　鶴城

白南風は梅雨が明けて吹く南風の意であるから、自ずとこの句には明るさがあり、花火大会や祭に出かける浴衣姿の女性を思い描く。普段和服を着こなしている女性のしなやかな所作を想像するが、うがった見方をすれば、その逆の姿かも知れない。

つつがなき今日に一献冷奴　　曲淵　徹雄

身にふりかかる難題や災いが無く、無事に夜を迎えた夕餉の晩酌は、その内容が細やかなものであっても心を充たしてくれる。冷奴は誰の口にも合い、庶民を代表する肴である。

青蛙忍術使ひ藪の中　　保坂　翔太

青蛙は、背面が緑色で腹面が白色である。カメレオンには到底及ばないが、環境に応じて体色を変える。掲句の青蛙は、草地から藪の中に移動して、少し褐色がかった色に変化させたのではなかろうか。青蛙に本来備わっている習性を、忍術に見立てたところが楽しくて面白い。むかし実在していた忍者＝忍びの者は、これとは逆に、自然界の動植物の習性や特性を術に取り入れていたのであろう。

あぢさゐ見事来し絵手紙もわが庭も　　塩野　久子

日本国内で絵手紙を描く人は何人くらい居るのだろう。何処のカルチャー教室にもその種の講座があるし、公民館でもやっているから、大変親しみ易い趣味なのだと思う。さて、この絵手紙に描かれている紫陽花は、紫を主体にこの花特有

の複雑な配色が施されており、思わず手に取ってみたくなるような立体感の溢れる絵であったのだろう。しかし、作者は一句の中に巧みに自己のプライドを示している。然り気無く下五に書いた「わが庭も」で、絵手紙の主にも自慢できるような見事な紫陽花の存在を明示しているのである。

送り火の殿行くは夫なるや　笹本　啓子

盂蘭盆会にお迎えした身近な縁者やご先祖様の御霊をあの世へ帰す魂送りの火は、迎え火とは逆に実に淋しくもの悲しい。目を閉じていると、見えぬはずの霊の姿が見える気がする。列の最後に、永年連れ添った吾が夫が、今年も名残惜しそうに何度も振り返りつつ遠ざかってゆく。

柏餅尻うつくしき金太郎　新井　孝麿

端午の節句に、五月人形の一つである金太郎を前に、柏餅を食べている祖父と孫の男児。元気な孫の語りかけに乗せられてぢいちゃんもついつい能弁になり、金太郎にまつわる話を得々と披露する。歌舞伎では怪童丸と称する金太郎の筋肉もりもりの逞しい尻に魅せられている祖父なのである。

蜜豆を我が人生の傍らに　西幅　公子

蜜豆は餡蜜と共に昔から甘味処の定番メニューで、大人の女性特に中年以上の年齢層のご婦人の好物のように感じている。そう言う筆者も大好きで、学生時代に母に棒状の寒天を溶かして蜜豆を作ってもらい、丼に山盛りにして食べていた。作者も大好物なのだろう。機会があれば必ず食べているように思える内容の俳句で、まことに微笑ましい。

警報器鳴り秋の蛍も通るらむ　山口　韶子

里山を通っているようなローカル鉄道の踏切を想像する。蛍が居るような場所にある踏切で、警報器はあるが遮断機は無い。たまに踏切を渡る人や車と一緒に、秋蛍もふわふわ飛んで行くのではないかという牧歌的な発想が新鮮である。

鶴翼の布陣ぞ霧の関ヶ原　新　暦文

一六〇〇年（慶長五年）九月十五日、石田三成の西軍と、徳川家康の東軍とが天下を争って戦った「天下分け目の合戦」を再現した俳句である。この句の季語は言うまでもなく「霧」で、合戦の日の早朝から立ちこめていたと伝えられる濃霧を表すと同時に、いま作者が接している霧に包まれた関ヶ原をも言い表している。この二重性がなんとも快い。

日焼子の一歩も引かぬ面構へ　横山　君夫

小学高学年生から中学生の男子を想定する。水泳や山歩き

などの屋外活動で、身体の露出部は焦茶色に日焼けし、眼がらんらんと輝いている。自分の信念を貫こうとする強靭な意識が、引き結んだ口と炯々たる眼に表れている。将来を嘱望された少年像である。

鯖鮓を真つ先に買ふ一人旅　　越田　栄子

数ある鮨ねたの中で、鯖が一番お好きらしい。筆者も鯖鮨が大好きで、若狭の小浜や京都の錦市場の味が絶品である。さて、旅の真っ先に買うとなると、旅の日数にもよるが、家人への土産とは考えにくい。となると、旅先の宿で、相好を崩して別腹を決め込む鯖鮨なのではないか。

水馬の泳法真似て伊賀忍者　　原田　秀子

むかし忍者が活躍した時代には、数多くの忍法が考案開発され、今でもそれを受け継いで研究している人達が居ると聞いている。忍法は、自然界の動植物の生態からヒントを得て考案されたものが多いようで、掲句の水馬の泳法もその一つだと思う。長い脚を使ってすーいすーいと水面を動き回る姿を観て考案されたのが「水蜘蛛」という樏（かんじき）に似た道具である。果してどの程度効果があったかは疑問。

エルメスの騎士像凛と西日なか　　加藤でん治

銀座五丁目並木通りの入口に燦然と輝く「メゾンエルメス」の屋上、白馬に跨がった騎士像に西日が射している。騎士が掲げている旗の正体は、四季折々に発売されるエルメスの新作スカーフであるとのこと。それを知って、この句の奥行の広がりを感じた。

文豪の住みたる町や涼新た　　外村　紀子

文豪が多く住んでいた町と言えば、東京・文京区の本郷・根津・千駄木が筆頭だろう。此れ等の町の界隈を散策すると、今でも当時の気分に浸れる。季語が雰囲気を捉えている。

ふんどしや天衣無縫の端居かな　　安倍　弘夫

端居は涼を求めるものだから、極力裸に近い状態が望ましい。男にとっては、越中ふんどしだけの端居が理想的だろうが、今時そんな天衣無縫な人物にはお目にかかれそうにない。

誰も彼も同じ事云ふ熱帯夜　　川島　典虎

身体を動かすのも口を開くのも億劫になる熱帯夜である。口を開けば「熱いねえ」の一言。時計の針が止まったようだ。

水琴窟

（水明集八・九月号鑑賞）

池田　雅夫

軒下に命ぞくぞく夏燕　　丸屋　詠子

五月から六月のころ、燕は子を育てる。五～六羽の子つばめが小さな巣の中から黄色い口をいっぱいに開け、餌をねだる。親の姿が見えると一斉に鳴きはじめる。「命ぞくぞく」の中に、子つばめの数、旺盛な食欲、逞しさが窺える。

赤銅の男が捌く初鰹　　笹本　啓子

漁師は強い日射しと潮風で逞しく日に焼ける。「赤銅」は本来、銅に少量の金銀を加えた合金で、赤黒い色をしている。また、その色をいう。海の男が豪快に捌く初鰹、その活のよさが伝わってくる。藁焼きのたたきか、ぶつ切りの刺身か。

レプリカの砲の向く先青葉潮　　橋本　京子

その昔、ペリーの黒船の来航など、外国船の攻撃に備えて砲台が築かれた。品川などの、いわゆる台場である。そのレプリカが展示されているのであろう。外国船の航路に向けてある。折りしも青葉の頃。黒潮の流れが接近している。

土佐湾の一本釣りや青葉潮　　千坂　平道

「土佐の一本釣」といえば、言わずと知れた鰹である。それを「鰹」とせずに「青葉潮」を選択したところに意外性がある。大海原の青と青葉が呼応して、深い印象を与える。

掛川の段々畑新茶摘む　　外村　紀子

掛川、牧の原から本川根の一帯は茶所で有名である。その昔、かの清水次郎長が尽力したと聞く。南アルプスに連なる山間部で、昼夜の寒暖の差や霧などが美味しい茶を作るのだろう。「段々畑」の措辞に郷愁をさそわれる。

白杖の軽き音して若葉道　　森　和子

「白杖の軽き音」と「若葉」がぴたりと合っている。若葉の道を軽やかに歩く姿が見える。「軽き音」が歩く楽しさ、嬉しさを物語っている。若葉の香りや風の暖かさなどを敏感に感じ取っているのだろう。何人にも優しい町でありたい。

花みかん口ついて出る唱歌かな　　宮井美恵子

「♬みかんの花が咲いている…」。いつになっても忘れることのない唱歌。幾十年歌っていなくても、ふとしたきっかけで口ずさむことがあろう。幼い頃の純粋さがよみがえる。これも若さを保つ秘訣の一つなのかも知れない。

長屋門出で延延と青田道　森下美智枝

「長屋門」は、近世の武家屋敷である。屋敷を出れば広々とした田ん圃なのだろう。豊かさが窺える。「延延」は時間的要素が強く、青田道を歩く行程を表わす。「蜿蜒」と表記すると、距離的な表現になり、空間的な解釈になる。

風立ちてざわつと青田マスゲーム　菅原　真理

ひと言でいうと「青田波」ということだろう。それを青田の「マスゲーム」としたところに俳諧味がある。「マスゲーム」は集団で行なう体操、ゲームを意味する。また、正方形に整地された田が「マス（枡）」を連想させ効果的である。

球拾ひのみの部活や夕長し　安倍　弘夫

部活動の部員は、レギュラーになれる数が限られている。また、一年生などは球拾いが主な部活動となっている者も少なくない。夕暮れの部活が長く感じたのだろう。「夕長し」の措辞は「日永」や「暮遅し」より切実な感情を表わす。

散り際の千々に乱るる紅牡丹　嶋田　洋子

牡丹は、古来、花の王とされてきた。大輪の豊麗さや気品を詠んだ句は数知れず。しかし、散り際を詠んだ句は稀である。「千々に乱るる」の観察力、表現力に感心した。

酒蔵の跡地にそびえ桐の花　榊原　聰子

桐は高さ一〇メートルにもおよぶ高木で、家具などの用材とされる。栄えていた酒蔵が何らかの理由で廃業したのだろう。その跡地には以前と変わらず桐の花が咲いている。土に浸みた酒のせいか、桐の花が少し濃く見えたことだろう。

田の水の先にはためく武者幟　小駒さち子

農村では、春田を打って土をほぐし、しばらくしてから苗代づくりをする。五月の始めごろは代掻きの準備のために水を張る。何枚もの田に充分に水をゆき渡らせる。武者幟は幟に武者の絵を描いたもの。のどかな田園風景が見える。

朝顔の双葉描きあげ得意顔　葛城千世子

小学校の低学年では、朝顔を鉢に植え観察する学習がなされている。種を蒔き水をやり、数日経つと芽が出てくる。双子葉植物である朝顔はまず二枚の子葉を生ずる。「得意顔」に子の表情が見えるようだ。花まるの評価にちがいない。

水面立つ運河の町の若葉風　遠藤　人美

大阪は「運河の町」とも言われ、淀川の河口にある。安治川、木津川などの川もあり、それを結ぶ運河が造られている。若葉の初々しい風が運河にも及び、初夏の景を演出している。

鼓笛集

山中 順子 選

湘南の潮の匂ひ濃紫陽花　　保坂　翔太
空蟬と光源氏か熱帯魚
竹取の翁そはそは秋立ちぬ

三日月のうきて八坂の塔の上　　日髙　道を
月白や露地行く人の左褄
仲秋や猫の瞳の満ちてをり

蓑虫も参加してくる立ち話　　野田　静香
暮残るブロック塀に槙櫨の実
秋夕焼海が映やせり赤レンガ

炊きあがる飯の匂や今朝の秋　　曲淵　徹雄
秋高し小宇宙てふわが五体
秋の声放生池に遊ぶ鯉

秋茜埴輪の里を一巡り　　原田　秀子
牛膝つけて戯れ合ふ小犬かな
ひさびさに琴柱をたてし月今宵

電線の連雀満を恐れずに　　南條きわゑ
名月や光と影に手を合はす
狭庭よりすいつちよ忙しく鳴きにけり

リフト行くうねり果てなき芒原　　橋本　京子
先頭を男等占むる鰯櫓
窓ごしに暮れてゆく海温め酒

ゆらゆらとつるし飾りや萩の花　　髙橋満耶子
吾亦紅つるし飾りを魔除とす
縮緬は猿や兎に萩の花

父逝きてはや五十年曼珠沙華　　高原　和子
手を合はせ父に語りし彼岸花
蒼天へすつくと立ちて曼珠沙華

いまいましき秋の蚊叩く残る跡　寺内　洋子
秋のマスクも楽しからずや陽の匂ひ
コロナ禍の秋図書館の匂ひ恋し

落人の里に灯火木守柿　外村　紀子
銀杏落葉掬ひては浴ぶはしやぐ子ら
梅花藻の清流早き秋澄めり

介護する夫の寝息やちちろ虫　野村　美子
平凡に生きよと父母が流れ星
基礎工事の重機の音や秋の空

鼓笛集巻頭（十月号）

私の好きな一句（自句自解）　菅原　真理

里帰りの声でふくらむ冬座敷

盆暮れには、離れていた家族が集まり食べておしゃべりする。それも、いつもは冷えきった冬座敷で。喜び幸せに満ち溢れた時を過ごします。今一番欲しいそんな情景です。

鼓笛集作品評

山中　順子

湘南の潮の匂ひ濃紫陽花　保坂　翔太
空蟬と光源氏か熱帯魚
竹取の翁そはそは秋立ちぬ

先ず舞台は平安に設定して語りが始まる。さて熱帯魚を見ていると追いかけられている一匹が目に止まる。その対が空蟬とひかるの君であるという。水槽の中の無言劇が助詞の「か」でしっかりと賛美している。そしてつづきにかぐや姫が出て来て秋になって月に帰ってしまうのではないかと翁がそはそはしてしまう。この三句は物語が底辺に流れる連作である。そして楽しませて頂いた夜長のペンが滑らかに走ってくれた。

月白や露地行く人の左褄　日髙　道を

この頃の明りは一番きれいに見える。お座敷に上るきりっとした生活の足取りは日本人だけにしか分らない情緒だ。どこで経験されたのか一度聞いてみたい。

仲秋や猫の瞳の満ちてをり

猫の目の妖しさが左褄の捌きを恰好よく形容してくれた。読み応え十分である。

水明通信

本部の皆様お元気ですか。

いつもお世話になります。異常気象でこの間迄暑くて今日は台風の影響で大雨が降り寒く感じます。

年をとってくると一番に健康が気になって来ます。天気の良い日は朝半時間程歩く事にしています。週一回、体操も密にならないように、気をつけてマスクしてやっています。皆様もお体に充分気をつけて下さい。

和歌山　南條きわゑ

❖原稿募集

季　音（雪・月・花）五句
水明集　五句（巻末添付用紙）
鼓笛集　三句（編集部より依頼のあった方）
※二百字詰原稿用紙使用。右上欄外に、季音（雪・月・花）・鼓笛集と朱書き。

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着

原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一

特集　生誕100年　飯田龍太にまなぶ
特集コラム　わが愛しのテレビ番組
◎巻頭作品10句
雨宮きぬよ・石井いさお・大高　翔
鈴木章和・高木瓔子・名村早智子
村上鞆彦・山崎ひさを

俳壇
11月号
10月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
坊城俊樹

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅱ期］……大島雄作・奥名春江
思想としての虚子……中村雅樹
続々・日本の樹木十二選……広渡敬雄
わが俳句道・わが金言（モットー）……鈴木貞雄
先人のことば……今瀬剛一
俳壇史エピソード……坂口昌弘
季語への供物……奥坂まや

連載
俳壇時評……堀田季何／俳壇月評……辻村麻乃
俳句と随想12か月　野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル　電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

句集喝采

近藤　徹平

◆小林榮子「花すだれ」

玉梓発行所

著者略歴　東京都生。結婚を機に京都市に定住。平成八年俳句の師名村早智子氏に出会い、平成十八年名村早智子主宰「玉梓」創刊の際編集同人。京都俳句作家協会会員。

名村早智子「玉梓」主宰の序及び著者「あとがき」によれば、著者の夫君は俳句に熱中していたが、平成三年急逝された。平成七年著者は自宅跡地にマンションを建設した。他方名村早智子氏は当時自身の夫君の転勤、子息の進学を両立させるため、著者の建設したマンションを購入し入居した。ここで著者自身が俳句を自ら親しむ端緒が開かれた。

紅枝垂花すだれとはこれなるや
除夜の鐘京に嫁ぎて幾年ぞ

第一句はご主人との心豊かな日々を振り返った句集の表題句。第二句、木場生れの江戸っ子は今や九十一歳の京女だ。

鴨川の光となりて初明り
応天門前に嘶く祭馬
神となり鉾に乗り込む鉾の稚児

京都の文物を詠み込むと途端に味わい深い句になる。鴨川は京都市民の心の故郷である。第二句、応天門は史上政治的陰謀の舞台として知られるが、著者の自宅に極めて近い。第三句、著者の親族の稚児が、令和最初の祇園祭の長刀鉾の稚児を務めたとのこと。恵まれた環境で一層の健吟を期待する。

◆庄司久美子「天泣」

文學の森

著者略歴　昭和二十五年兵庫県豊岡市生。平成三年「槐」入会、平成二十年同人。現住所大阪府枚方市。

著者「あとがき」によれば、「三十年ほど前、三歳の娘が持って帰ってきた俳句カード」を見て俳句を始めたという。

天泣の大地七色龍の玉
補陀落の海に鳶鳴く寒露かな
禁色の入日横切る寒鴉

第一句は句集の表題句、「天泣」は雲が全く見えないのに雨が降るという起きえない現象だが、なぜ起きたかを俳句は詮索しない。第二句の補陀落は南海にある観世音菩薩の住む山だが、句材にするのは珍しい。第三句の禁色も合成染料万能の昨今ほぼ死語である。語彙の極めて豊富な作家である。

花柘榴手提げの底のサスペンス
磯蟹の集会帰り雲の音
天界の導火線なり冬の虹
あかべこの首ふる茶の間近松忌
ドナドナドーナ荷台の大根揺れながら

高橋将夫「槐」主宰は「序」で「俳味豊かな取合せに作者の感性が発揮される」と記す。第一句の花柘榴とサスペンス、第二句の磯蟹と雲の音、第三句の導火線と冬虹、第四句の置物と近松忌、第五句のフォークと大根。何れも絶妙である。

りんどう忌の記

丸山マスミ

第五十一回りんどう忌は、九月二十六日、さいたま市民会館うらわにおいて修された。

生憎の雨模様の天気、コロナ感染予防のための自粛の風潮の中、参加者は三十五名。

机上には、かな女師がお好きであり、第一句集名になっているりんどうが活けられ、会場に雅な雰囲気を醸し出していた。

兼題　りんどう忌・かな女忌と鰯雲

司会・開会の辞　境　延昭氏

かな女師への黙祷

主宰挨拶

コロナ感染に配慮し、ディスタンスを保った広い会場で、本日第五十一回りんどう忌を修する運びとなりました。

先日、水明創刊九十周年記念号（八・九月合併号）が刊行されました。

私も思いをこめて作品を詠み、所感を述べましたが、特別寄稿の作品を寄せて下さった皆さん、編集の皆さんのご努力で充実した素晴らしい本になりました。有り難うございました。

記念号の表紙は「水明」創刊号の、かな女師の描かれた「ほおずき」の絵を使わせていただきました。周りを水明ブルーで囲みましたので、はっと目を惹くものとなりました。

十一月の全国大会は、残念ながら記念祝賀会を実施できませんが、その内必ず開催する予定です。

かな女師を偲びつつ、本日の会が盛会となることを期待いたします。

喜寿のお祝

今年喜寿を迎えられた内田恵子さん、曲淵徹雄さんに、それぞれのお名前を詠み込んだ主宰のお句の色紙と色紙掛けが贈られた。

お目出とうございます。

ご芳志の披露　茂木　和子氏

披講　五明　昇氏

主宰詠

鰯雲出でて張り切る一輛車

顔舐めて起こす子犬よりんどう忌

主宰選

天　ケンケンパ茜に染まる鰯雲　月を

地　卓袱台と絣の韻きかな女の忌　寛治

人　片恋の記憶の破片いわし雲　延昭

天・地・人　色紙授与

溯る大河の起かな女の忌　鈴木和子

水明に卒寿の誉れりんどう忌　昇

百周年へ今日から一歩かな女の忌　節代

追憶の紫紺極むるりんどう忌　喜恵

年譜よりとび出す足音かな女の忌　チアキ

刃文めく遠き連峰鰯雲　治子

西鶴も虚子も呼びたしかな女の忌　マスミ

――以上特選　短冊授与

迷ひ入り文学の道鰯雲　はるみ

りんどう忌供ふ新酒の「赤城山」　光子

もう一つ鰯雲あるガラスビル　稀香

鰯雲さらに夢湧く八十路かな　公子

超高層のガラスの壁にいわし雲　義子

拾ひたる石に焦げ跡竜胆忌　徹平

鰯雲かな女の猫が追ふ構へ　和葉

天界に投網打ちたや鰯雲　倭子

墓買うてなほ望郷の鰯雲　延昭

かな女忌や師在すごと句碑に触る　喜恵

ダム湖わたる鐘は空音か鰯雲　由紀子

宮大工足場組み上げいわし雲　順子

紫は高貴と知性りんどう忌　鶴城

大佐渡へ投網打つたり鰯雲　昇

「二十四の瞳」の校舎鰯雲　翔太

合併号の水明ブルーかな女の忌　月を

いわし雲著きかな女の江戸言葉　節代

みづうみは空の鏡よ鰯雲　かつ子

どつこいしよととつかかる坂鰯雲　徹雄

かな女忌や粉挽き唄も今は無く　道を

年輪の渦を数へてかな女の忌　美佐尾

かな女賞受賞に感謝りんどう忌　水尾

創刊号の表紙再びかな女の忌　栄子

「ねばりひき」遺墨の文字やかな女の忌　茂子

地がそつとため息吐くや鰯雲　理恵

棒高跳其の上に視る鰯雲　章嘉

夢見心地のトランポリンや鰯雲　チアキ

歳月の振り子は確かりんどう忌　治江

九天のすみずみまでも鰯雲　茂木和子

まだ挫折知らぬ少年鰯雲　恵子

鰯雲絵筆に余る波の色　寛治

りんどう忌話の弾む友とをり　鈴木和子

「小雪」をよむ至福の時間鰯雲　治子

渦潮を躱す小舟や鰯雲　マスミ

主宰講評

今年は、特選の上に天・地・人を選ばれ、一句から七十句まで全句にわたり丁寧で具体的な講評があった。

高得点者発表と賞品授与

一位　丸山マスミ　二位　境　延昭

三位　大村　節代　四位　越田　栄子

五位　高島　寛治　六位　五明　昇

七位　宮﨑チアキ　八位　松本　光子

閉会の辞

星野　和葉氏

生憎のお天気でしたが、皆さんの熱気と主宰の熱の籠もったご講評で盛会の内に、かな女先生の忌を修することができました。

今日の細かい雨は「皆さんお集まり下さって……」というかな女先生の嬉し涙かも知れません。

九十周年記念大会に向けて、また一段と励みましょう。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木　和子
境　延昭　報

連れ舞の呼吸ぴたりと涼新た　大場順子
吸取紙を上るインクや涼新た　〃
秋の朝吸気整へ太極拳　喜恵
芋虫の角に威厳や朝の路　チアキ
乳を吸ふ赤子の額秋暑し　はるみ
芋虫に世を睥睨のちからあり　光弥
芋虫の逃亡早き足捌き　和子

――以上特選

芋虫やハイカラ気取りアボカドに　理恵
吸引す秋はわからぬ味もてる　光弥
道に芋虫とつさに踏まぬやうに避け　大場順子
芋虫をまぢかに見れば小指ほど　光子
芋虫を除け損なひし下駄の音　節代
骨董のやうな吸呑み秋しづか　由紀子
満腹の至福に芋虫眠りたる　稀香
芋虫をつぶす心に輪廻の語　マスミ
吸ひ口を探す子守や秋深し　徹平
芋虫や隣りの空き家通る風　はるみ
新涼の吸盤で吊る守り札　延昭
残る蚊に吸はれまだまだ一万歩　和葉
梯子酒するかに秋蝶蜜を吸ふ　治子
ひとり居ることも楽しや芋虫肥ゆ　喜恵
芋虫に頓狂な声遊歩道　チアキ
芋虫や生涯みどりのシースルー　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田　絹映　報

新米の艶掘り起こす杓文字かな　峰雄
臆病な色鳥なぜに目立ちたる　鶴城

――以上特選

色鳥のうたふ異国の相聞歌　昌弘
新米の粘り強さを碗にもり　陽子
今年米大盛りにして仏壇へ　敏江
指先に軽き昂ぶり新米研ぐ　みどり
色鳥や旅行鞄を撫づる母　登志子
色鳥や褪せた町にも到来す　いちい
新米を炊きて香の立つ台所　峰雄
新米といふ喜びに感謝のみ　玲子
新米や今朝の卵に黄身二つ　寿恵
何処にゐるチルチルミチル色鳥来　鶴城
戦場に餓死せる兄へ新米を　竺仙
しゅぱしゅぱと新米炊ける湯気の中　禮子
絹映

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵　徹雄　報

つくつくしタウト旧居は磴の先　徹雄
あぶれ蚊やあなたによろけ沈下橋　萬蝶
空蝉の空に向きては天を恋ふ　岡野順子
朱の椀に新蕎麦を足す紺絣　大場順子
山間をゆく陸蒸気走り蕎麦　雅夫
読み止しの本よりのぞく秋扇　祥絵
新蕎麦待つ正一合の田舎酒　〃昇
十州に連なる信濃走り蕎麦

――以上特選

秋暑し赤きマスクの六地蔵　徹雄
独り居の手酌に添ふる走り蕎麦　萬蝶
目薬の一滴ぴたり涼新た　大場順子
常よりもすする音優し走り蕎麦　理恵

走り蕎麦喉越しつるり我に添ふ　岡野順子
乗り継ぎの駅のホームの走りそば　喜久
新蕎麦や善光寺平今日も晴　祥絵
新蕎麦を共に食べたき人遠し　由美
恋ならぬ男と女白芙蓉　康世
馬子唄の小節にほろり走り蕎麦　雅夫
鵙日和回廊に吊る大杓文字　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
境延昭報

秋の朝客の混み合ふサラダバー　昇
ステイホームに届く故郷の桃一荷　〃
白桃の夭夭として子の嫁ぐ　順子
ふくよかな志功の天女水蜜桃　〃
糊効きしワイシャツの襟秋の朝　翔太
打ち傷の絶えぬ少年桃啜る　恵子
伏す母の傍に置きたる桃の籠　寛治
秩父嶺に雲悠々と秋の朝　玲子
——以上特選　修
深呼吸散歩に誘ふ秋の朝　延昭
秋の朝木目艶めく黄楊の櫛　光子
ウォーキング風の追ひ越す秋の朝　寛治
新聞を両手で拡ぐ秋の朝　マスミ
トロ箱にまだ跳ぬる魚秋の朝　暦文
秋暁や青春キップ北へ発つ　光弥
素謡の「黒塚」あげて秋の朝　恵子
秋の朝柱時計の螺子を巻く　玲子
秋暁の湖凜々と逆さ富士　でん治
白桃やくまなく薫る留守の部屋　順子
一椀の白湯に透ける身秋の朝　喜恵
呼び鈴のひとときは高き秋の朝

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

浮雲の影の波うつ芒原　水尾
金になり銀に返して芒原　〃
万屋の猫の擦り寄る秋の夜　義子
残照の芒野原に放心す　玲子
子にできぬ説教猫に秋の夜　理恵
独り寝の腕（かいな）惑ひし夜半の秋　〃
朝風に真赭（まそほ）の芒ほぐれゆく　佐江
——以上特選
漁り火のとろとろ灯る秋の夜　水尾
をんなの子芒ヶ原に攫はれて　美佐尾
札所出て山路（やまぢ）一里花芒　義子
落城の濠に叢立つ芒かな　玲子
友来たるすすき二本と酒さげて　はるみ
夕映えや金に溶けゆく花芒　佐江

関西例会（大阪）

森本早苗報

白桔梗手作り句集残し逝く　早苗
新蕎麦やにはかに動く山の雲　玲子
里山に秋光放つ古代門　千津子
行く水も行き交ふ雲も白露かな　敦子
一陣の山雨分けゆく秋の蛇　ゆら女
月光の文したたむる淀の波　智恵子
去ぬ燕制空権の空越えて　道子
稜線は目線にありて初紅葉　千枝子
——以上特選
秋の蝶力絞りて風に乗る　早苗
秋の蝶木々の間をあらだてず　玲子
表敬のごと一刻を秋の蝶　礼子
野仏に何か囁く秋の蝶　千津子
朝の陽をためて舞ひ立つ秋の蝶　ゆら女
花時計覗いてもどる秋の蝶　敦子
秋蝶の元気羨しや家籠る　洋子
風孕む裾を舞ひゆく秋の蝶　智恵子
秋蝶のささやきを聴く乙女像　和子
忠魂碑のうしろへ消ゆる秋の蝶　道子
人気なきキトラ古墳に秋の蝶　千枝子
ねむくなりひとやすみする秋の蝶　千世子
秋の蝶介護する友愚痴言はず　きわゑ

若松句会（京橋）

菊池ひろこ
石田慶子報

秋刀魚焼く皮の弾けて海の音　月を
今日もまたはぐらかされて秋刀魚焼く　萬蝶

晩節の秋刀魚の苦みつくづくと　萬蝶
彩雲に交ざれ秋刀魚の黒けぶり　はるみ
身を焦がす恋も良きかな秋刀魚焼く　佐江
秋刀魚来い日の本の海甘露なり　理恵
秋刀魚焼く古関裕而を口吟み　知子
秋刀魚焼く煙がおよぶ裏鬼門　ひろこ

――以上特選

好日や背骨は折れず焼秋刀魚　月を
秋刀魚焼くSmoke Gets In Your Eyes　萬蝶
秋刀魚焼く尾頭付きの夕餉かな　知子
秋刀魚焼く彼の持参の塩をふり　慶子
故郷は近くて遠しさんま焼く　倭子
食べ方の綺麗な人よ焼さんま　佐江
品書の秋刀魚の文字やよそよそし　俊晴
秋刀魚焼くだけの七輪備長炭　鶴城
夕風や秋刀魚のけぶり横丁に　千春
子が除けし秋刀魚のわたに舌鼓　理恵
初秋刀魚けぶらせ疫を蹴散らかす　はるみ
暮れなづむ笊をはみ出す秋刀魚の目　ひろこ

☆

☆

歳時記寄贈のお願い
「はじめての俳句教室」へのお誘い

この度、11月20日㈮、21日㈯に例年通り南区別所沼公園にて「はじめての俳句教室」を開催いたします。本年は例年の５月から11月に時期を移しての開催です。

そこで初めて俳句に接する方々のために水明の皆様に歳時記のご寄贈をお願い申し上げます。既に使用されなくなった初心のころにご使用の歳時記など、ご寄贈をお願い申し上げます。

寄贈先：水明発行所　宛

また、水明の皆様へも、もう一度、初心に返ってお勉強をしたいという方々のご受講もご案内申し上げたく存じます。「市報さいたま」への記事掲載もございます。ご活用ください。

直接に公園事務所へ申込んでも、ＨＰでの申込でも構いません。発行所へのお問い合わせでも構いません。奮ってご参加ください。

※「はじめての俳句教室」
11月20日㈮、21日㈯の両日10：00～16：00の開催で、受講料￥1,000です。

普及推進部

各地句会

若狭水明会（若狭）

新涼や鋏が飛ばす木の匂ひ　初花
ポタージュのスプーンに映る秋の薔薇　和風
門閉づる音や寺院に秋深し　白鷺
みんみんや句碑は寡黙を通しをり　保人
露草の藍色きりりと空の色　鼓
苔の花大吠ゆる碑の裏おもて　郁子
初産の声満潮に鷹渡る　寛久
饅頭の皮にはりつく残暑かな　ことは
静かなるかな女の句碑の露の玉　祥子
地の神の髭剃るごとし草刈女　想子

野菊の会（浦和）

涼新たマチスの赤のひときはに　清子
いとほしやこの見収め酔芙蓉　和子
足元に匂ひの届く刈田道　光子
白桃すする今しばらくの純情　美代子

櫻蔭句会（浦和）

群とんぼ全八ヶ岳一望す　美智枝
赤とんぼ群れて棚田の家郷かな　茂子
落日へ野武士走るか鬼やんま　由紀子
爽やかな風飲み込みてヨガポーズ　真理
網振つて追ふたまゆらの銀やんま　美紗子
ラジオ体操その輪の中に赤とんぼ　公子
裏庭に今年も二匹黒蜻蛉　多美子
畑仕事終へて面上げ風さやか　幸代

柿の木塾（浦和）

爽涼や比叡へ急ぐ笠の列　昇
鵙日和シフォンケーキのふつくらと　節代
爽やかや馬の額に白き星　恵子
爽やかや筆の運びも人柄も　水尾
さはやかや磨きぬかれし神楽殿　かつ子
百舌鳥啼けり謂れ無き死の又一つ　光弥
爽やかや一本松に雲一朶　俊晴
爽やかや茶柱すくと今日の糧　和葉
すれ違ふ女子高生の爽やかに　和子

かわせみ句会（浦和）

今日の月煌煌とある交差点　順子
穂の先の揺れるとんぼや風と空　良枝
満月や湖に写りし逆さ富士　のぶこ
心地よき風を纏ふや秋茜　保子
名月や吸ひ込まれたる旅の宿　友子
名月や豊な影を隈なくに　治郎
無人駅音なくふゆる赤とんぼ　功
名月や森の地蔵の長き影　紀子
名月や梢と雲の語り合ふ　せいじ
満月や絹の衣を纏ひけり　育子

水明小川句会（小川）

稔り田を見渡す夫の口ゆるむ　綾子
うたたねやかなかなの声母の声　きよ子
名作の並ぶ本棚秋暑し　みや
野仏に微笑みかける秋の風　武
星月夜野道見守る地蔵尊　むら子
旅先の新蕎麦挽く音風に乗る　和子
産土の遠き山より秋の声　栄子

あゆみの会（浦和）

貨車せまるレールの上を秋の蝶　重子
虫時雨入眠剤がまだ効かぬ　朋子
蝶に似る小さき花に秋の蝶　山遊
痛み止めの二錠が頼り秋の夜　和
秋蝶は天の化身か供花に寄る　圭子
百薬の長を枕の秋夜長　藻好

水明鬼石句会（鬼石）

縫針に錆を残して夏終はる　和子
朝夕のやさしい風や秋来たる　聡子
古き家ひとり暮らしや秋刀魚焼く　ナヲ子
秩父寺秋の七草探しけり　洋子

桜林句会（大宮）

住職の作務衣軽やか今朝白露　光子
庭下駄のかすかな湿り白露かな　知子
みくりが池しじまにつづる白露かな　一恵
ハーブティの温みの美し白露かな　光代
面取れば八重歯の少女葉鶏頭　美佐尾

俳句の手ほどき（岩槻）

つづれさせ砂のつまづく砂時計　順子
風の盆流線型の笠の波　倭子
つづれさせ座り直してなほ無策　ます美
こほろぎの声胸うちに雨戸繰る　慶子
くしけづる髪の細りやつづれさせ　佐江
基肥は秘伝の有機菜種蒔く　延昭
板の間に大の字床下にちちろ　徹平
秋灯や基本の辞書は手離さず　水尾
本尊の陰でとよもすちちろ虫　翔太
仕舞湯に浸りこほろぎ夢現　美佐尾
夕霧の車両基地へと回送車　義子
元元は皆百姓よちちろ虫　忠男
客の無き通夜に鳴き添ふちちろ虫　幸代
痛み耐へなぜと呟くちちろ虫　美子
風呂落とす声の限りをつづれさせ　かつ子

雛の会（浦和）

水楢の葉擦れも軽し秋の声　かつ子
鬼灯の網目の中の日暮かな　燈女
推敲を重ぬる夜や秋の声　佐江
廻廊は風の迷ひ路秋の声　喜恵
鬼灯を鳴らす少女のしたり顔　チアキ
雨上がり堰音高く秋の声　むら子
足ぶみのオルガン重し秋の声　輝翠

神戸大池句会（神戸）

いくたびも深呼吸する残暑かな　玲子
花も木も夏の名残りの狭庭かな　礼子
何あらん残暑の中を百度踏む　千津子
蜩の哀調沁みる日暮かな　早苗

ミモザの会（横浜）

赤とんぼ回る木馬の優しき瞳　玲子
長き夜開いたままの日記帳　由美子
ニッコリと目で挨拶の今朝の秋　亜弥子
淡淡と日々暮しをり酔芙蓉　栄子
ガス台磨き一汁一菜九月かな　知子
老眼鏡探すまで無く台風の目　慶子
心音の少し不規則すがれ虫　萬蝶
何の羽音いまだ残暑のつづきをり　史代
兄になる児の揺るる心や秋桜　千春

けやきの会（東京）

早朝の門前動かぬ秋の蝉　由美
走り蕎麦過去の色もつ山上湖　祥絵
またぎの宿地酒とする走り蕎麦　康世

芽吹句会（浦和）

笹舟を一気に流す秋の風　チアキ
花野来て上書きさるるわが詩歌　ひろこ
風爽か松韻わたる須磨の浜　玲子
車椅子心平らに花野中　千重子
リフトより花野見下ろし手を振りぬ　富子
秋風や庭に真白き椅子二つ　道を

野ばらの会（浦和）

悠久の古墳を望む新松子　秀子
いつか子も親となりたる新松子　栄子
朝採りの生姜の香り類なし　茂子
生姜掘る農婦の膝に陽が転げ　治江
初めての夫婦げんかや新生姜　夏江
うす紅の季の魁新生姜　和子
錆び付いた肩のこはばり新生姜　みき子

水明熊谷句会（熊谷）

葡萄食む子等も何時しか多弁なり　治江
一株の稲の重みを刈り取りぬ　栄子
葡萄刈帰りのバスの「武田節」　徹平
稲刈や家族が揃ふ実りの田　正行
甲州の陽に透き徹る葡萄挽ぐ　和子
ぶだう狩浅間の煙今日も白　秀子
夫逝きし稲刈る音の一つ消ゆ　燈女
デラウェア病の友の口ほぐる　茂子

水明大阪俳句会（守口）

新涼の風に差し出す掌　ゆら女
病疫蔓延お隣り遠き秋であり　洋子
たじろがぬ蟷螂の子のスケルトン　智恵子
虚栗をとこは仕事ありてこそ　人美
夕月や抱き上ぐる子の湯の香して　和子
コロナ禍の真つ只中に生を享く　敦子

りそな俳句会（浦和）

秋暑し乗換への駅の人の黙　道を
「どつこいしよ」インコが喋る残暑かな　暦文
今年米袋の耳がシャンと立つ　寛治
新米をそつと研ぐ手に緊張感　京子
炊飯器買ひ換へて炊く早稲の飯　久美子
新米はそのままが良し塩むすび　建治郎
新米を手土産にして父上京　雅夫
今年限りと届く新米ずつしりと　マスミ

芙蓉句会（浦和）

さやけしやリハビリ朝の充実感　正子
ロザリオに快癒を願ふ秋の夜　道子
病院の固き背凭れ夜半の秋　税子
馬齢かな数へて九十秋夜酒　仁
終電に競ふ足音秋の夜　美子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

花火果て闇に星座のととのひぬ　延昭
繋ぐ手を離さぬやうに花火の夜　倶子
夜長かな聞いてほしくて独り言　淑子
胃袋をむんずと摑み鷹の爪　俊晴
かなかなや白寿の母は鶴を折る　美枝子
手習ひの変体仮名や夜長の灯　正信
止り木に火の酒嘗むる街夜長　昇

りんどう俳句会（浦和）

晩酌の当ては小皿の鰯二尾　弘夫
銀鱗の回遊ショーや鰯跳ぶ　サヨ子
鰯煮て骨までほろり夫ごのみ　紀子
群るること許さぬ世情鰯焼く　治子
跳ねあがる棹と口上鰯売り　徹雄
在りし日の面影追ふや花野道　翔太
少子化の村の学び舎秋の蝉　正信
大花野まんなかにゐる我小さし　利子
花野ゆく再び母に逢へるかも　寛治
夕日浴び子らは花野の風となる　君夫
秋蝉の終の一声澄み通る　典子
秋の蝉天空遥か仰視せり　卓郎
目秤で掬ふ小鰯曳売女　順子

円卓の会（浦和）

秋の田や村に子宝親宝　道を
後ろ手に格子戸閉めて秋終る　輝翠
花すすき格天井の駅舎かな　翔太
邦楽の間のごとさやか夕の雨　静香
月光や鳥獣戯画を写し取る　月を
秋深む膝の子猫の喉の鳴り　鶴城

青葉の会（浦和）

地の熱を花にあづけて曼珠沙華　美紗子
秋の蚊や隣家の庭の線香よ　真理
秋の蚊にまとひつかれて採る野菜　美智枝
別れ蚊の最後の羽音残る耳　啓子
棚田の畦をまつ赤にもやす曼珠沙華　公子
夜長し古着解いて何にせむ　美子
巡礼や寺を染めゆく曼珠沙華　洋子
秋灯下読めぬ掛軸惟みる　和子
秋の蚊の必死にすがる下駄の足　輝翠

たかんな俳句会（川口）

敬老日眉間にはたく粉おしろひ　史子
秋夕焼錦織りなす佐渡の海　久美子
一人じめ秋夕映えの田舎道　福美
急ぐ帰路背後に迫る秋夕焼　律子
湾に立ち先人偲ぶ秋夕焼　勢津子
荒川のバス停に佇つ秋夕焼　鈴木和子
朱を極む陽明門の秋夕焼　義子
鉄塔が秋夕焼に呑まれける　妃実子
峰々の先に峯々秋夕焼　鶴城
蓑虫は見ざる聞かざる話さざる　真知子
秋夕焼句をたたむ割烹着　水尾
秋夕焼生徒二人の連絡船　静香

花衣の会（浦和）

旋回の蜻蛉よ空はなほ広し　みよ
花野行く人も小鳥もよく歌ふ　京子
あきつ群れ棚田だんだん暮れてゆく　みち
とんぼよとんぼ何を見て来し眼の光　峯雄
満二十才（はたち）赤紙の来ぬ敗戦日　治
石仏を老女は拭ふ花野かな　章嘉

珊瑚の会（浦和）

撫子やぬれて遊女の墓いくつ　光子
菩提寺へつづく道なり葛の花　史代
鳴かぬと云ふに鳴かす粋狂蚯蚓鳴く　和子
みみず鳴く日ぐれに糸のやうな雨　広子
蚯蚓鳴くジョーカー一枚ポケットに　和葉
一山をじわりと占むる葛の花　かつ子
聞き流す噂話やこぼれ萩　喜恵
陋屋にいたはり住むや女郎花　マスミ
乗り継ぎて来たる鎌倉萩盛り　水尾
蚯蚓鳴く錠前固き流刑小屋　昇
黒光りの框にどさりと秋の七草　恵子
すすき桔梗大きな壺に萩も活け　節代

きざきサークル（浦和）

天の川神話語りし恩師逝く　喜代子
山深き湯宿は二軒天の川　啓子
銀河濃しきつと何処かに父母の星　倶子
百五十年「澤の出流（いずる）」の新酒なり　和枝
すき間より銀河の見ゆる夫の声　タイ
荒海や波音はこぶ初嵐　かつ子
天の川灯火まばらな一揆の地　和子

鶴川山百合句会（鶴川）

酔芙蓉項に一筋後れ髪　廉三
アメリカ芙蓉大きな顔が気に障る　雄二郎
初秋や山々己の場に聳ゆ　月を
ジャッキーチェンの酔拳ゆるゆる酔芙蓉　史代
恥ぢらひの乙女はいづこ白芙蓉　広子
踊り場に蝉腹見せて秋の風　知子
初秋の街路樹ほつと一息す　由美子
「また会はむ」がかなはぬ知らせ白芙蓉　千春
仮の世の恋の色やも酔芙蓉　萬蝶
新しきシューズを試す初秋かな　理恵
白芙蓉夭折画家の裸婦像よ　玲子

和歌山水明句会（和歌山）

雲いまだ鰯になれず秋暑し　和子
蜩や晩鐘時刻早くなり　道子
飛鳥路に人の跡絶えて萩の花　千枝子
数歩後に消えてしまひし秋の虹　千世子
秋暑し猫が天下の城下町　満耶子
稲の葉に露光りたる散歩道　きわゑ
秋耕やまづ雑草と格闘す　洋子
新涼の水吸ひ蝶のVサイン　廸代

蝌蚪の会（浦和）

一日が一年といふ白木槿　元美
沈黙を広げて破る秋扇　さち子
無花果の心許無き甘さかな　礼子
秋扇に心静もる日のありぬ　宣子
片恋の思ひひきずる秋扇　るみ子
無花果や曝してならぬ腹の内　鶴城
クワガタと思ひ込んでた法師蝉　月を

光が丘俳句教室（東京）

熊除けの鈴の鳴り来る夕花野　守伊
チャンバラの子等見えかくれ花野原　はる
見晴るかす花野の先はオホーツク　康子
病床で朝待つ夫の夜の長し　史子
遠き日を引き寄せて居り赤とんぼ　竜也
夜の長し眠りに落ちるための本　理恵

皐月の会（浦和）

秋の川友禅染に生宿る　静香
秋団扇置かれしままの祭の字　久子
夢も恋も深くしまひぬ秋扇　暦文
ラーメン餃子テレビの上の捨てうちは　きいち

山茶花（浦和）

転調し遠のきゆきぬかなかな　マスミ
草紅葉を褥としたり阿蘇寝釈迦　泰子
草もみぢ「今日よね」と念を押す人のあり　清一
箱根路を歩み一面草もみぢ　美江子
移りゆく季節彩どる草紅葉　しず子
尾瀬ヶ原木道つづく草紅葉　光子
鳴き満ちて蜩夕日と共に消ゆ　綾子

櫟の会（浦和）

秋めくや静かに深く香を聞く　富子
露しとど座禅の御堂押し黙る　千重子
句作して深夜に至り露の音　彰二
秩父路や馬頭観音露けしや　光子
野仏の細き眼の先赤とんぼ　裕之
露の世を斜めに生きるへそ曲がり　克之
朝露や村に光の舞ひ降りる　朋子
裏窓や一日尽くして閉づ木槿　治子

水明松本句会（松本）

石組みの崩れ窯跡枯落葉　恒子
空青くロマンを誘ふ鰯雲　陽子
こつそりと練習してます運動会　マリス
リモートでつもりつもりと過す秋　玲子
はるかなる思ひ出運ぶ秋の風　寿子

新樹の会（浦和）

秋茄子の紫の花二つ咲く　平通
もうこれが終りと貰ふ秋茄子　京子
秋冷や朝刊来しもひと眠り　清吉
冷やかや顔を撫で行く窓の風　修
秋茄子や母校の女優先立ちぬ　道を
爽やかや路地の体操子供会　でん治
相伴の席のにぎはひ秋の夜　韶子
雨冷えを帰す一枚羽織らせて　鶴城

水明発行所受付時間

曜　日：（月・水・金）

時　間：午後１時から午後５時

（火・木・土・日・祭日は休み）

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

新春俳句大会のお知らせ

［日　　時］ 2021 年 1 月 31 日㈰　午前 10 時受付　12 時開会

［会　　場］ 浦和駅東口　浦和パルコ 10 階　第 13 集会室

［投　　句］ ２句　当季雑詠「初」の付く新年の季語 締切 11 時

［参 加 費］ 2,000 円 （お茶・昼食付）

※コロナの時節柄、懇親会は行いません。

［申　　込］ 参加費を添えて、1 月 14 日（水）までに総務部宛

担当：行事部・第 1 例会

「水明創刊90周年記念」全国大会・祝賀会日程についてのお知らせ

【全 国 大 会】 令和２年 11 月９日（月）

ロイヤルパインズホテル浦和４階「ロイヤルプリンセスＡ・Ｂ・Ｃ」３室を繋げ、１テーブル１人掛けにして充分に間隔を保ち安全を期す。

【祝　賀　会】 無期延期とする。

新型コロナウイルス感染状況の好転をもって、改めて開催時期を検討し決定する。

全国大会開催要領

［期　日］　令和２年 11 月９日（月）13 時～ 16 時
※受付 12 時より

［会　場］　ロイヤルパインズホテル浦和４階
「ロイヤルプリンセス」

令和３年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句
締　　切	令和３年２月末日（発行所必着）
応募方法	水明 12 月号に応募用紙添付

生誕100年の俳人 特集
飯田龍太 津田清子 野澤節子 眞鍋吳夫

追悼・鍵和田秞子

✤巻頭三句
安西 篤 宮田正和 水田むつみ 坂口緑志 足立賢治 宮谷昌代

✤俳句と短歌の10作競詠
西村麒麟 伊波真人

✤その時、俳句手帳
和田順子

✤今月の華
屋内修一 伊藤康江

緊急企画!?
ステイホーム中につき……写真で一句詠んでみました

✤好評連載
南 伸坊 猫の俳句
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西 朋 俳句へのまなざし
神作研一 手のひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
酒井佐忠 本の窓辺
二ノ宮一雄 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2020年11月号 10月20日発売 定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

風　声

○**俳句四季**九月号――「作品八句」欄　山中　順子

「草蛍」

島々のゆるり覚めをり朝曇
朝焼や汚れを嫌ふ肋骨
梅雨寒や中吉と出る水みくじ
好きな水選ぶ草の秀糸とんぼ
水底を晒す小石や泉湧く
ひんやりと埋る藍甕梅雨の蝶
青柿の落下に人の住む匂ひ
待つほどに寄つてくれたる草蛍

○**現代俳句**九月号――「現代俳句年鑑二〇二〇を読む」欄　田中　章嘉

阿部仲童子氏の感銘十句抄

初午や何処かに妻が居るやうな

○**現代俳句**九月号――「現代俳句の風」欄

兄嫁の秘密の漏路茸狩　大塚　茂子
いつもの席にあなたがゐない秋の風　越田　栄子
吹かれゐて夕日を揺らす秋簾　野平美紗子
悠紀斎田に誉れの風や天高し　丸山マスミ
緑さす窓辺に開く新刊書　田寺　玲子

○**天塚**（宮谷昌代主宰）九月号――「珠玉一句」欄　**鬼之介**

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣

○**幻**（西谷剛周）九月号――「受贈誌拝見」欄

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）九月号――「受贈俳誌紹介」欄　**鬼之介**

忍び言かはす若葉の垣根越し

○**太陽**（柴田南海子主宰）九月号――「一誌一耀」欄　**鬼之介**

羅を粋に着こなしお部屋様

○**菜の花**（伊藤政美主宰）九月号――「諸家近詠」欄　**鬼之介**

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣

○**玉梓**（名村早智子主宰）九・十月号――「他誌拝見」欄　**鬼之介**

羅を粋に着こなしお部屋様

○**山彦**（河村正浩主宰）九月号――「諸家近詠」欄　**鬼之介**

赤心に微かなくもり黒ビール

○**天穹**（屋内修一主宰）九月号――「俳誌探訪」欄

塚本一夫氏筆による水明六月号の紹介記事

（掲載句のみ紹介する）

「華の一句」

総帆展帆「ごきげんよう」と燕来る　丸山マスミ

「主宰作品より」

蝋石の落書のみち若葉風　〃　**鬼之介**
鞭声はただごとならず新樹邸　〃
赤心に微かなくもり黒ビール

「季音雪より」

鳥・虫・人叫びたくなる山櫻　大橋　廸代
乱れ髪の傀儡の笑まふ春の宵　大村　節代
陽炎の土中で焦ぐる火打石　栢尾さく子

桜餅刀自に老舗の戸の重さ　菊池ひろこ
俊寛の小さき奥つ城鳥雲に　五明　昇
花吹雪会津はいまも城を守る　境　延昭

「季音月より」

薫風やひしほの匂ふ城下町　田寺　玲子
春野ゆく名のみ遺りし小町井戸　柚木　治子
お忍びや枝垂梅に匿はれ　小倉　倭子
春祭禊の海のほんだはら　鳥羽　和風
赤赤と水は火を練る水送り　宇田　白鷺
三味の音のまつたり届く春の昼　丸山マスミ

「季音花より」

開ききりもはや戻れぬチューリップ　松井由紀子
春装は貝紫の恋ごろも　梅澤　佐江
春の雪明かりにひらくリルケの詩　井上　玲子
初蝶の一途な動き吾も立てり　原田　想子
巣燕の客に馴染みし無人駅　松宮　保人
まほろばの大和は今し紫雲英の田　野平美紗子

「水明集より」

丸めたる紙の匂ひや光悦忌　青木　鶴城
朧なる稜線後に発車ベル　野田　静香
芽柳や銀座の母は今いづこ　日髙　徹
那須おろし避けて寄り添ふ壺すみれ　渋谷きいち
足下に小さな宇宙下萌ゆる　越田　栄子
疎ましや連理の枝も梅の夜も　正木　萬蝶
（日髙道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和二年九月三十日現在―

山中　順子　30口　石山かつ子
匿名　3口　日髙道を
井田　眞子　12口　大場順子
小山　敦子　1口　松本光子
川野　妙子　20口　河野はるみ
大村　節代　10口　西幅公子
小計76口
―りんどう忌にて―
丸山マスミ　1口　曲淵徹雄
青木　鶴城　2口　小倉倭子
保坂　翔太　1口　大塚茂子
星野　和葉　1口　神田治江
大村　節代　1口　鈴木和子
石井　喜恵　1口　越田栄子
茂木　和子　2口　柚木治子
田中　章嘉　1口　2口
小計46口
―合計122口―

誤植訂正

八・九月合併号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

一〇九頁上段一行目

誤　河×口　襄「星空」

正　川○口　襄「星空」

後記

新型コロナウイルスの収束も儘ならぬまま今年も後二ヶ月を残すばかりになった。そして、二〇二〇年八月・九月合併号をふまえ水明創刊90周年の大会を11月9日に行う。三密を守り、マスクを使用した雰囲気の大会は考えてもいなかった。異様なものではないかと思うが、それでも実行出来るだけ幸せと思う。

私事ですが、この二月から心不全なる厄介な病気を発病して多方面に多大な迷惑をおかけした事を心よりお詫びします。特に句会の幹事さん、そして主宰の理解あるご処置により甘えていましたが、ここで私に係わっていた役を全部解いて頂いた。

大会運営につきましては、幹事会の皆様の団結により万端出来上り感謝し、御礼申し上げます。コロナの為私は出席出来ませんが、受賞者の方々には沢山のお祝を申し上げ、大会の成功を心より祈念致します。

（順子）

最近とみに句を作る時に頭を悩ましている。年齢のせいと人は云うかも知れないが、自分としては素直に認めたくないと思いつつ、謙虚に受けとめもう少し素直になった方がよいのではないかと思う。確かに言葉がすぐ出て来なくなったり発想の貧しさが気になったりと思う所が多々ある。

そもそも俳句をしようと思ったのは、どんな気っ掛けだったのだろうと思い返してみた。子供の手が離れた時、これからどう自分が生きて行きたいのかを問うた時、これからの人生を明るく楽しく心豊かに過して行きたいと思った。その時俳句に出会ったのだ。だったら今俳句の原点に戻れば良いのではと古い書棚から「はじめての俳句づくり」なる本を取り出して読み返した。

誰にでも出来る。思った事、感じた事を素直に表現する、物をよく見て観察眼と写生眼を養う等々、人生まだまだこれからが勝負。頑張る頑張る。

（和子）

毎年、彼岸の中日には決まって咲いていた曼珠沙華が、今年は一週間ほど遅れて咲いた。その花も終り今では葉が20㎝にも伸びている。「葉見ず花見ず」とは良く言ったものだ。十月に入って晴れの日が少なく、これが原因かどうか分からないが、柿の色づくのが遅い様な気がする。毎日落ちる葉の中には綺麗な葉があるのに、柿の葉は厚みがあり栞にはならない。

日替りで変る気温の厳しい変化に植物も戸惑っているのだろう。この時季に月下美人が一つ咲いた。ためらい気味に見えたが立派に。秋明菊は小さい花だが堂々と。来年の夏に咲く姫ひおうぎの芽がもうあちこちに出て来た。「これから寒くなるのよ」と声をかけたくなる。植え替えをさぼっていたシンビジウムは、鉢にびっしり詰った中から花芽が二三本出てきた。強い！しかし、いつの間にか消えてしまった草花もある。月見草や釣舟草を思うと寂しい。

（和葉）

水明

令和二年十一月号
通巻一〇八二号
令和二年十一月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

水明集

二月号　十一月二十五日締切

都市又は府県名	氏　名（俳　号）

きりとりせん

季音抄

山本鬼之介

新蕎麦待つ正一合の田舎酒　五明　昇
兵児帯の衣桁にあまる初秋かな　境　延昭
白桃すする今しばらくの純情　椎野美代子
記念樹の一つ年取り椿の実　島津　初花
たまさかの真夜の目覚めに鉦叩　鈴木　康世
漁火へ吸ひ込まれゆく流れ星　田寺　玲子
てのひらを返し白波風の盆　小倉　倭子
連れ舞の呼吸ぴたりと涼新た　大場　順子
「一葉」の滋味ある筆よ白芙蓉　柚木　治子
魂迎師に問ひたきは「や・かな・けり」　鳥羽　和風
かなかなの微睡み誘ふ木のベンチ　森本　早苗
片陰に入れて我が子の手を握る　高島　寛治
棚田から案山子が見やる父母の家　井口　俊晴
恋唄を指の先まで風の盆　梅澤　佐江
オフェリアの歌は幻聴夕花野　井上　玲子
明け方の雨はアダージョ秋に入る　松井由紀子
今日もまたはぐらかされて秋刀魚焼く　正木　萬蝶
笹舟を一気に流す秋の風　宮﨑チアキ

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明　令和二年十一月一日発行　毎月一日発行

水明抄

山本鬼之介

夕焼の中にふる里かくれんぼ　渋谷きいち
命綱結ぶ鳶職炎天下　染谷正信
美容室の鏡の中の七変化　野田静香
蝸牛破産知らせる紙赤し　日髙道を
こころ乱るカンナの萎えを背にしては　神田治江
白南風や下駄の運びと裾さばき　青木鶴城
つつがなき今日に一献冷奴　曲淵徹雄
青蛙忍術使ひ藪の中　保坂翔太
あぢさゐ見事来し絵手紙もわが庭も　塩野久子
送り火の殿行くは夫なるや　笹本啓子
柏餅尻うつくしき金太郎　新井孝麿
蜜豆を我が人生の傍らに　西幅公子
警報器鳴り秋の蛍も通るらむ　山口韶子
鶴翼の布陣ぞ霧の関ヶ原　新暦文
日焼子の一歩も引かぬ面構へ　横山君夫
鯖鮓を真つ先に買ふ一人旅　越田栄子
水馬の泳法真似て伊賀忍者　原田秀子
エルメスの騎士像凛と西日なか　加藤でん治

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

（第九十三巻　第十一号）　定価　一〇〇〇円